

# ウェーバーの現実科学方法論

——構成主義批判——

関 雅 美

## (一) 科学の区分

### 方法による科学の区分

経験的現実の世界は、われわれの「内」と「外」とを問わず、前後左右に現れては消えていくさまざまな事象の、時間的にも空間的にも、量的にも質的にも、見通し難い無限の多様である。一つの事象についても事情は同じで、どんなに単純そうにみえるものでも、詳しく検討すればするほど、さまざまな内容をわれわれに示す。このように現実の世界は、全体においても部分においても、汲み尽くし得ない多様であるとすれば、それを忠実に再現し模写することは、有限な人間精神には不可能である。だからわれわれは認識に際して、無限の多様の中から有限な部分だけを選び出し、それだけが知るに価するという意味で、本質的なものだと考えることにせざるを得ない<sup>(1)</sup>。その際どんな部分が本質的とされるかは、「認識素材のザッハリッヒな性質」によってではなく、主観の「認識目的の論理的特性」によって決まる<sup>(2)</sup>。ウェーバーによれば、こうした認識目的として、(一)法則的に反覆するものの追求と、(二)一回的特殊的なものの追求、

の二つが考えられるので、科学はこれに応じて法則科学 *Gesetzeswissenschaft* と現実科学 *Wirklichkeitswissenschaft* に分かれる<sup>(3)</sup>。法則科学の目的は、無制約的に妥当する法則体系を構成することであり、「知るに価する本質的なもの」とは、事象における「類的なもの」である。ここでは、個別的なケースに対する科学的関心は、それを一つの類概念に実例として従属させるのに成功するや否や消滅する<sup>(4)</sup>。

これに対して現実科学の目的は、現実をその「質的特徴的な特性と一回性において」認識することであるから、「個性的特性」こそが「知るに価する本質的なもの」である<sup>(5)</sup>。だがそうは言っても、一般に現実というものは、すべて特殊性と一回性において与えられているので、われわれはそれを、われわれにとって本質的な意味を持つ特殊性と、そうでないものとに区別しなければならぬ。だがこの区別もまた、認識の素材のザッハリッヒな性質によってではなく、認識主観が対象に対して抱く関心によって可能となる。だから現実科学では、特定の「価値関心」、「価値観点」が認識を導いていなければならぬ。その時々には観察される個性的現実のほんの一部分だけが、認識主観の価値関心によって色づけられ、知るに価するもの

とされるのである。<sup>(6)</sup> だからある価値に関係づけ、それに対して無記なるものと、意味あるものとに分けることは、現実科学的考察から切り離し得ない操作である。ウェーバーによれば、現実科学としての文化科学の仕事は、個性的文化事象の「文化意義と因果連関」の認識であるが、多様の中から特定の対象を選び出すことも、その対象が持ち得る多くの文化意義の中から特定の意義だけを選び出すことも、また無数の原因の中から特定のものを「適合的」原因と認めて選び出し、結果としての対象をこの原因に「因果的に帰属させる」ことも、すべて特定の価値観点の導きによるのである。

科学の目的と方法に以上のような截然たる区別があるということは、そのいずれか一方だけでは、科学の方法全体をカバーし得ないことを示している。リッケルトは彼のいわゆる「方法論的自然主義」——「自然科学」の方法こそが科学の普遍的方法で、「歴史科学」もこれによってのみ真の科学になり得るという主張——を厳しく批判した。ウェーバーもまた、現実科学を法則科学に解消しようとするこうした立場を「自然主義的一元論」と呼んで、執拗なまでに批判する。<sup>(7)</sup> これは自然科学の目覚ましい成果に惑わされた偏見であるが、ロッシェーラの「歴史学派」も、結果的にはこうした立場に陥っていた。歴史学派は、歴史科学を法則科学とみる古典学派に反対し、それを現実科学にしようという意図を持っていたが、因果性と法則性を混同したため、歴史事象の原因——結果の因果連関を因果法則と混同し、歴史的因果連関と自然科学的因果法則を同一視した。また彼らは「合法的なもの」と「認識主観にとって本質的なもの」を混同している。そのため彼らは、歴史科学においても合法的認識を認め、経済の「自然法則」や国家の「発展法則」の把握を、「歴

史的」国民経済学の目標にするという不整合に陥った。<sup>(10)</sup> こうした自然主義的一元論を批判することは、「歴史学派の子」と自称するウェーバーにとって、とりわけ緊急を要することだったのである。

ところで、精密自然科学は事実上法則科学の方法に従っているの、法則科学を自然科学と呼ぶことができる。また広義の文化事象（人間の事象）を研究する文化科学は、事実上現実科学の方法に従っているの、現実科学を文化科学と呼ぶことができる。（もともと、文化事象は歴史的社会的なものでもあるから、歴史科学や社会科学と呼んでもよい。）ただこうした呼び方は、自然事象と文化事象が、それに固有な内的本質に基づいて、必然的にそれぞれ違った取り扱いを要求することを意味しているのではない。素材が方法を規定するのではなく、認識目的が方法を規定する。だから文化事象の法則科学的取り扱いも、自然事象の現実科学的取り扱いも、論理的には可能である。ただ文化科学は現実科学的方法を要求するような認識目的を事実上現に持っているし、自然科学はその逆だということだけである。自然科学——文化科学（歴史科学、社会科学）の対立は、法則科学——現実科学の対立に基づくものである限り、認識目的による論理的区別であって、対象による区別ではない。

（注）リッケルトは科学を専ら方法の違いによって自然科学と歴史科学に分け、前者の特徴として「一般化的」と「価値からの自由」を、後者の特徴として「個別化的」と「価値への関係づけ」を挙げた。ウェーバーは法則科学について「価値からの自由」を特に問題にしていなければならない、彼の法則科学——現実科学の区分論は、リッケルトのものと本質的には同じである。

だがリッケルトは徹底したカント的構成主義に根差す方法第一主義の立場から、方法の違いによらない対象の区別の可能性を否定した。つまり科学には本来ただ一種類の対象しかなく、それが一般的に扱われると「自然」の対象に、個別化的に扱われると「歴史」の対象になるといふのである。自然—文化についても同様で、リッケルトを整合的に解釈する限り、方法を抜きにして対象が「自然」か「文化」かを論ずることはできない。だがウェーバーは、法則科学—現実科学の対立が方法のみに基づくことを強調してはいるけれども、方法によらない対象の区別の不可能性については全く触れていない。リッケルトのカント的構成主義、方法至上主義がこうした主張にまでエスカレートする限り、ウェーバーは——後にみるような理由によって——そこにリッケルトの行き過ぎをみていたように思われる。

### 素材（対象）による科学の区分

上述の科学の区分は、素材と無関係に主観が任意に追求する認識目的と方法によるものであったが、ウェーバーの科学区分論には、こうしたリッケルト的形式論を遙かに超えるものが含まれている。彼によれば、素材の中にはその本質的な性質によって、特定の方法を取ることを主観に要請するものがあり、この種の方法の違いによって、科学の新しい区分が可能になる。これは方法による区分という点では以前のもと同じだが、方法の起源と内容は全く別である。

対象が自然事象の場合、われわれはそれを普遍的法則に関連づけ、それで説明できさえすれば十分に満足する。だが人間の行為については、同じやり方では満足しない。なぜなら、行為はそれ自身

の中に「何らかの思念された *gemeint* 主観的意味」——例えば「具体的動機ないしは動機複合体」といったもの——を含んでいるからである。それでわれわれは、動機やその複合体を理解し、当の行為をそれから捉えようとする。ウェーバーに倣って、主観的意味の理解による行為の把握を「*解明*」*Deutung* ないし「*解明的理解*」*deutendes Verstehen* と呼ぶならば、*解明*（*的理解*）なしに行為の十分な把握は不可能である。だから行為を法則科学的な普遍的法則に関連させ、それによって説明することができたとしても、われわれはそれだけでは満足しないであろう。また逆に行為の意味が理解できた場合には、当の行為が普遍的法則によって説明できるかどうかを特に問題にすることはない。こうした「意味の理解」による「*解明*」こそ、周知のようにウェーバーの「*理解社会学*」*verstehende Soziologie* の狙いであった。これは人間の行為が意味を持ち、それによって規定されているために、従ってまたそれによって説明できるものであるために、要求される方法であって、主観が認識の素材と無関係に任意に立てる目的から生じた方法ではない。もし人が同じ方法を自然事象に適用すれば、「*死せる自然*」を「*生きたもの*」とみなす、特殊な形而上学に陥ることになるであろう。自然事象はその本性上、*解明的把握*を排除する<sup>(14)</sup>。こうした理由によって、人間の行為を対象とし、その意味の理解を志す科学——「*行為の科学*」*Wissenschaft vom Handeln*<sup>(15)</sup>——と、意味とは無関係な自然事象の純然たる法則的説明を志す科学——*自然科学*——の区分が生ずる。前者は、人間の行為が文化的歴史的社会的現象である限り、文化科学、歴史科学、社会科学と呼ばれてもよい。

ディルタイは J・S・ミルなどの考えを継承して、認識の対象を

自然（物體的なもの）と精神（心的精神的生）に分け、前者を対象とするものを自然科学、後者を対象とするものを精神科学と呼んだ。前者は普遍的法則による「説明」的方法を取るのに対して、後者は解釈学的方法によって、精神的生を意味、価値、目的、理想などの「生の範疇」に則して、構造連関的に「理解」する方法を取る。こうした方法の違いはディルタイによれば、対象の本性の相違に根差すものであった。これに反してリッケルトは、科学の区分を対象とは無関係な認識目的と方法に基づけただけでなく、方法の区別によらない対象区別の可能性をさへ否定した。彼が対象の区別に基づく「精神科学」というディルタイ的名称を避けたのもそのためである。これに対して行為の科学というウェーバーの考えは、哲学史的にみれば、ディルタイ的区分法を再び導入したものとと言えるだろう。だからウェーバーは、方法の違いのみによる法則科学—現実科学の区別を立てる点ではリッケルトを引き継ぎながら、対象の内的本質の相違による方法の区別もあり得るとした点で、リッケルトの科学論の一面性・抽象性——これはカント的構成主義によるものである——を、ディルタイに即しつつ超えていったわけである。もっとも、対象の違いが方法の区別を要請するという考えがリッケルトに全然なかったわけではない。啓蒙的著作である『文化科学と自然科学』の中で、文化事象の意義はその個性的特性の面にあるから、その研究には歴史科学の個別化的方法を適用しなければならぬと言われている所がそれである。しかし私が以前に他の論文で指摘しておいたように、方法の徹底的優位を主張するリッケルトにとって、これは完全な不整合であった。だがウェーバーが対象による科学の区別を認めたことは、決して不整合とは言えないだろう。彼はリッ

ケルトの分類法の一面性の明確な自覚の上で物を言っているからである。このようにウェーバーが少なくとも科学区分論では、リッケルトほど徹底した構成主義・方法至上主義の立場に立っていないことは注意してよい。

#### 社会学と歴史学の位置づけ

ウェーバーは行為の科学を規範科学（法学・倫理学・美学など）と経験科学に分類し、後者を更に社会学と歴史学に分けた。社会学は理解可能な行為の一般規則、ないしは反覆性を持つ理念型を探索し、歴史学は「個々の文化的に重要な行為・形象・人格の因果分析と帰属を求める」<sup>18</sup>。社会学は一般規則を形成するための資料を歴史学的研究から受け取るし、歴史学は社会学が示す一般規則を手掛かりにしなければ、具体的な因果帰属を行えないので、研究の実際面では、両者は不可分の関係に立っている。だが両者の認識目的の論理的性格は正反對で、一方は一般的なものを、他方は個別的なものを目指す。歴史学がどんなに一般的なものを必要としようと、それはあくまで手段としてであるにすぎない。一つの具体的結果を一つの具体的原因に帰属させることが、歴史学の使命だからである。<sup>19</sup>だから社会学—歴史学の対立は、対象の区別に基づく分類法から生じた科学の分野（行為の経験科学）に、対象と無関係な方法の区別に基づく分類法（法則科学—現実科学）を適用することによって生じたものと言えよう。社会学は行為に関する経験的法則科学であり、歴史学は行為に関する経験的現実科学である。<sup>20</sup>

(注) 行為に関する経験的法則科学と行為に関する経験的現実科学という、社会学と歴史学のこの規定は、『ロッシェンとクニース』第三部にその萌芽が現れ、『経済と社会』冒頭の『社会学の基礎概念』で明確になった區別——行為に関する経験科学を、一般に個別かという認識目的の違いによって、社会学と歴史学に區別するもの——に、法則科学と現実科学の区分名称を筆者が適用して整理したものである。科学の二つの区分法を社会学と歴史学の対立に整合的に割り振れば、こうならざるを得ないだろう。

この場合問題になるのは社会学である。なぜなら、純然たる法則科学が求めるのは、すべての質的相違を量の関係に還元することによって得られる、数学的に定式可能な普遍法則であるのに、ウェーバー社会学が実際に求める一般法則は、行為の特殊な諸様式とでも言うべきものだからである。しかもこれは一種の理念型で、自然科学的法則と違って、特定の価値観点なしには構成することのできないものである。だから社会学は一般的なものを求める点で法則科学に属するとは言っても、その一般的なもの性格が、法則科学の典型としての自然科学的法則と異質な点では、それはむしろ現実科学に近づくようにみえる。ウェーバー社会学は、法則科学の方法によって社会法則を発見しようとするものではなく、「主観的意味に基づく行為の解明」を志す経験科学であるから、認識目的の点では法則科学となじまない。しかしだからと言ってそれを現実科学に位置づけるだけでは、現実科学内部での社会学と歴史学の区別の原理的説明に窮する。一般と個との対立は、認識目的の論理的性格としては正反対だからである。

リッケルトは自分がやった自然科学(一般化的)と歴史科学(個別化的)の峻別は、認識のぎりぎりの最終目標についてのもので、研究の実際面では、両者の区別は相対的なものになることを認めているが、ウェーバーでも事情は同じだということ、この問題を打ち切るより仕方ないのかも知れない。彼は、「方法論は実際研究で正しいことが確認

された方法の自覚にすぎないから」、「解剖学の知識が正しい歩き方の前提ではないように、方法をはっきり意識することが、内容豊かな研究の前提ではない」と言い切ることでできた実証家である。そうした人が散発的に触れている科学区分論と、実証的研究との完全な合致を求めるのは無理なのかも知れない。

#### 方法論的個体主義——歴史観と社会観の根底にあるもの

歴史学の使命は法則把握にあるのか、個別的事象の叙述にあるのかという問題は、繰り返し論争されて来たテーマである。リッケルトは「歴史法則」を断固として拒否し、個別的事象の叙述を歴史学の使命とみた。もっとも彼が歴史法則を拒否したのは、一般に「法則」なるものは、自然科学の一般化的方法によって発見されるものだから、彼の方法至上主義からすれば、歴史に関する法則も、「自然法則」と呼ばれなければならないという理由による。一般化的方法とその所産(法則)が歴史の重要な研究手段であることを否定したのではなく、最終目的ではないと言ったまでである。だからウェーバーが歴史学を行為に関する現実科学と規定する一方、研究の実際面では社会学的一般規則に依存するとみたことは、抽象的方法論のレベルでみる限り、リッケルトと同一線上にあることになる。法則の研究——歴史と考え、歴史学を法則社会科学に還元しようとする極端な「法則史学」の立場に、ウェーバーは立ってはいない。歴史は社会「構造史」*Strukturgeschichte*の上に立つ「事件史」であるというのが、現代の多くの実証的歴史家の立場であろうが、ウェーバーの立場も——事件史に傾きすぎ、構造的視点到問題が多いとは言

え——類型的にはこれに属するとみることが不可能でない。（これについては第五節で立ち入って論ずる。）

ところで、『社会学の基礎概念』のある所でウェーバーは、歴史学を行為に関する経験科学と規定しながら、同じ論文の他の箇所では、「個々の文化的に重要な行為・形象 *Gebilde* 人格の因果分析と帰属を求める」と書いていて、行為のほかに形象と人格が挙げられている。形象とは個人の行為と次元を異にするもので、例えばある特定の国家とか教会とかゼクテとかといったものであろう。ウェーバーの実証的研究から判断すれば、彼が人格やその行為より、むしろこうした形象の方を重視していたことは間違いない。こうしたことと、「行為に関する経験科学」という規定は矛盾しないであらうか。——この問題の詳しい検討は、ウェーバーの立場を一層明らかにするのに役立つであらう。

今の場合、形象についてのウェーバーの見方がポイントになる。彼はある所で、行為を主観的意味から理解しようとする社会学にとっては、「行為する集合的人格は存在しない」こと、意味に規定された行為の担い手は個人でしかないこと、国家のような形象も、意味を持った個々の人間の社会的行為へ「還元」されることを主張している。こうした見方は、ウェーバーの「個人主義的方法」とか「個人主義的立場」と呼ばれて、議論の種になって来たものだが、彼の立場がこうしたものとすれば、歴史学の対象を行為とみることと形象とみることとの間には、何も矛盾はないことになる。

だがそれにしても、形象を個人の社会的行為に還元して考察するというのは、どういうことであらうか。これは形象を個人の単純な総和とみなすような個人主義的立場とは関係がない。ウェーバーは

例えば国家を、それが個人の行為において果たす機能というレベルで捉えようとしているだけである。換言すれば、国家に属することによって、個人の行為の内容や経過がどのように規定されるかをみようとする。だから国家形象は、個人の意識の中において行為を規定し方向づけ、強い影響力を行使する「表象」として、つまり行為の「主観的意味」として扱われるわけであり、行為を規定する意味の面から人間的事象を理解しようとするウェーバーが、形象をこうしたレベルで捉えようとしたのは当然と言えよう。この国家表象は、個人の意識の一表象である限り、確かに主観的なものにすぎない。だが、諸個人の社会的行為を規定し得る限り、機能と内容の点では超個人的である。国家は個人の単純な総和でないし、主観的表象に還元できるものでもないが、諸個人を規定する表象ないし意味のレベルで捉えることはできる。そしてこれは形象に対する一つのアプローチなのである。だが現象学的にみるならば、一般に形象はこうした形で存在することなしには、機能し得ないのであるまいか。ある個人が、赤裸々な暴力行使の形で国家権力の発動の前に立たされているような特殊なケースを除けば、そう言えるのではないか。その意味では、これは一つのアプローチであると言うよりは、むしろ形象の現象学的存在様式を示すものだと見えよう。超個人的なものは、こうした存在様式を取らなければ、個人を内面から動かす力となり得まい。

だがそうは言っても、機能と内容の点で超個人的な、この思念された意味内容は、どこから出て来るのかと問うならば、事態は一変するであらう。なぜならその時には、主観的意味の次元を超える、文字通り超越的なものの導入が不可避的であるように思われるから

である。「意識の現象学的哲学」の立場に立つのでなければ、この種の問いを立てることは不当ではない。だがウェーバーはこれを、「さしあたってはどうでもよい *einzelne zunächst*」問いとして、意識的に回避しようにみえる。こうした回避によってのみ、形象の主観的存在様式への注目と研究が可能になると信じたからであろう。

ウェーバーにとって、認識とは意識的に選ばれた一面的把握にすぎず、十全な認識は、一面的なものの継時的積み重ねによってしか可能ではなかったのである。だから問題の存在様式は、やはり一つのアプローチにすぎないと言わねばならぬ。だが彼が形象の具体的把握を厳しく拒否しているところをみると、前述の問いの回避がウェーバーにとって、文字通りさしあつてのものにすぎなかったかどうか、一面性の十分な自覚を伴ったものであったかどうかは、疑問の余地があるように思われる。そこに彼の社会学の「個人主義的立場」を云々する余地が生じて来るわけであろうが、それは今の問題ではない。われわれにとっては、彼がこうしたアプローチをし、そしてそこにとどまろうとする限り、歴史学の対象が行為とされようと、形象とされようと、結局は同じことになることを確認すれば、それで十分である。

ところで、形象を——従ってまたすべての時代や、時代から時代への推移をも——それに関与する諸個人の社会的行為を規定する主観の意味のレベルで捉えようとする試みは、実は独自の歴史観と離れ難く結びついている。それは、主観的なものが歴史的因果連関の一環として機能し得るという見方である。行為の主観の意味と、それから生ずる客観の結果とがしばしば喰い違ふことは、歴史の事実が示している。それ故マルクスは、人間の主観的意思や意図にもか

かわらず貫徹する客観的法則があると信じた。極端な法則史学の立場に立つ者も同様であろう。ウェーバーがこうした喰い違いの事実を十分に知っていたことは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』からみて取ることができよう。だがそれにもかかわらず、主観の意味が歴史を動かせることも事実であると私は考える。なぜなら第一に、種々の形象は多くの場合、それに属する諸個人の行為を内面的に規定する主観の意味として現象することによってしか、歴史の主体として機能し得ないからである。第二に、思念された主観の意味は、既存の形象の個人の意識面での存在様式に尽きるものではない。それは新しい形象を形成したり、既存の形象を修正する力となり得る理念や理想や目的でもあり得ることによって、歴史の過程に影響し得るからである。第三に、主観の意味と喰い違ふ客観の結果も、前者がなければ存在し得ないからである。主体Aが自分の主観的目的aを成し遂げたことが、主体Bに目的bを目指させる結果になったり、あるいは目的aを目的bの手段として使わせる結果になったりすると、Aがその意図とは違うbを引き起こしたようにみえる関係が生ずる。これは「目的と手段の重層関係」と呼ばれるものだが、歴史はこうした事態の複雑な連鎖である。これは諸個人の主観の意味と無関係なところか、かえってそれに担われているのである。ただわれわれの認識能力が限られているために、因果関係の複雑な絡み合いを手繰り切ることが十分にはできないので、主観の意味から独立しているようにみえるにすぎない。諸個人の行為の衝突・相殺・相互平均化などによって、歴史の巨視的現象が合成され、諸個人の微視的な動きと違った法則的な動きが現れるなどと言われるような場合も、これと同様に考えることができよう。第四

に、主観的なものはマルクスなどが言うように、客観的なものの単なる関数ではなく、それに影響する力を持ち得るからである。また主観的なものはそれから影響を受けるにしても、影響の実態は主観的なものの在り方に大きく左右されることになる。客観は主観の中に入り込み、主観の意味に変形することによって初めて、それを動かす力になるのが普通である。その際、どんな形の意味になるかは、客観の在り方だけで決まるのではない。こうした意味で、主観的なものは客観的なものから影響される場合ですら、それから相対的自立性を持つて機能する。第五に、歴史や社会のいわゆる必然的法則について言えば、もしそうしたものがあつたところ、それが示しているのは「論理的必然」であつて「現実的必然」ではない。法則の内容が現実的必然となるためには、初期条件の挿入を必要とするが、これは法則の実現を望む主体の力によるわけではない。だが主体はその在り方のいかんによっては、そうした条件を入れようとするだけでなく、法則の実現を妨げるような逆の条件を入れようとするかも知れない。だから自然法則と違つて「社会法則」というものは、一つの思想を持った主体が絶えず意識的に支えていなければ、法則自体がぐらつて来るといふ性質を持つてゐる。それで仮に必然的法則があるとしたところで、初期条件を入れようとする主体の決断——つまり主観的なもの——がなければ、歴史はそれに沿つて動きはしないのである。<sup>29</sup> もっとも、歴史の巨視的な動きに、法則が支配していると言つてもよいような動きがみえることがあり、そうした動きやその一般的条件が意識的主体に影響し、主体がそれらの指示する方向に沿つて、ごく自然に動いてゐるような場合もある。これは主観的なものが最も僅かな機能しか果たさないケースであらう。

う。だがそれにしても、諸個人は単なる自動人形ではない。彼らの些細ではあるが意識的な動きなしには、歴史はやはり動かないのである。（なお、このパラグラフの問題は、第五節で別の角度から再び論じられる。）

ウェーバー自身が上記五つの理由をどこかでまとめて論じてゐるわけではない。これらは私の解釈である。だがそれにしても、諸個人の行為を導く主観の意味が歴史的因果連関の一項となりうることを、ウェーバーは十分に知つてゐた。「行為の経験科学」は、こうした自覚とそれに見合つた方法によつて、歴史と社会をみようとする。これは歴史の客観的進行が、主観の意味をしはば超えて行くことがある点に、研究の焦点を合わせてはいない。また前述のように、主観の意味が何に基づいて生ずるかも知尋ねていない。だからこれは歴史への一つのアプローチである。法則的なものや、そのほかさまざまな意味での客観的なものの側から歴史をみようとする逆の立場も、一つのアプローチであるように。そしてウェーバーは——社会学に前述のような問題の箇所があるにしても——自分の研究の一面性を自覚していなかつたわけではない。もともとそうした柔軟さが彼の身上なのである。彼の立場は個人主義ないし個体主義と言われているが、それは本来自覚的に選ばれた方法論上の立場にすぎないはずのものなのである。<sup>30</sup> リッケルトにとつてと同様ウェーバーにとつても、認識は常に現実からの選択とその変形でしかなかつたし、「現実科学」は特定の主観的価値観点、問題意識からする一面的把握にすぎなかつた。新しい一面的把握の可能性が示されることによって、新しい研究と新しい真理が開かれる。認識の進歩はこうした一面的把握の協力によつてしか可能でない。<sup>31</sup> だから歴史学を行為



に関する意味把握の現実科学とみる所には、歴史学者ウェーバーの自覚的態度決定があったのである。もともと歴史学のこうした規定は、科学の形式的区分のレベルでのことであって、実証研究のレベルでは、彼はもっと多彩な一面的研究の積み重ねを行っていると云えるのではなからうか。方法論の抽象的な枠組みを、多彩な実証研究が踏み越えていること、換言すれば、多彩な内容を方法論が必ずしも十分にはカバーできていない所に、ウェーバーの強みと弱みとがあるのかも知れない。

(注) ウェーバーの個体主義は前述のように、歴史への一面的アプローチであることを自覚した上で取られた方法論上の一つの立場にすぎないはずのものであった。だがこうした立場は、客観的なもの、一般的なものが果たす機能を軽視する結果、単なる方法論的立場の域を超え、一つの歴史観になりやすいし、彼の場合も現にそうなっているようにみえる所がある。特に第三節以下で述べる歴史学方法論では、そうした傾向が顕著である。こうした歴史観やその基になった方法論的個体主義は、リッケルトから引き継いだ構成主義的認識論と関係し、「神々の闘争」という時代の宿命に耐えるウェーバーの主体の実践的エトスともつながっている。これらのものが科学論に及ぼしたさまざまな難点については、次節以下で論じられる。

- (1) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Dritte Auflage, 170f. (以下本書からの引用は単にページ数のみを示す)(徳永 恂氏訳『社会科学および社会政策的認識の〈客観性〉』『現代社会学大系』五、青木書店、三〇ページ)
- (2) Weber, 12, 177f. (松井秀親氏訳『ロッシヤーとクニース』)(三ーページ、徳永氏訳、三七ー八ページ)

ウェーバーの現実科学方法論 (関 雅美)

- (3) Weber, 3—6 (松井氏訳、(一)一—一六ページ)
- (4) Weber, 4f., 13f. (松井氏訳、(一)四—一五、二八—二九ページ)
- (5) Weber, 5f. (松井氏訳、(一)五—一六ページ)
- (6) Weber, 175 (徳永氏訳、三五ページ)
- (7) Weber, 163f., 174, 175, 178 (徳永氏訳、二二—二三、三三、三五、三八ページ)
- (8) Weber, 177—179 (徳永氏訳、三七—三九ページ)
- (9) Weber, 171f., 184—189, 208 (徳永氏訳、三一、四四、四六—四九、七〇ページ)
- (10) Weber, 7—9 (松井氏訳、(一)八—二二ページ)  
浜井修氏『歴史法則』と人間の自由(金子武蔵氏編『歴史』理想社所収)八一—八四ページ
- (11) Weber, 208 (徳永氏訳、七〇ページ)
- (12) Weber, 12, 52f., 126 (松井氏訳、(一)三〇、一〇〇—一〇三、(一)五一—一六ページ)
- (13) 拙稿「リッケルトの歴史哲学」(『金沢大学教養部論集』十一巻所収)第六節参照
- (14) Weber, 12f., 67—70, 74, 75—77, 135f., 427, 429 (松井氏訳、(一)三一、一三九—一四五、(一)一—一三—一四、一三五—一三六ページ)  
林 道義氏訳『理解社会学のカテゴリー』一三、一五一—一六ページ
- (15) Weber, 545 (阿閉、内藤両氏訳『社会学の基礎概念』一三ページ)
- (16) 拙稿「リッケルトの歴史哲学」二七ページ
- (17) Weber, 12 (松井氏訳、(一)三—四ページ)
- (18) Weber, 559, 570 (阿閉、内藤両氏訳、三一、四六ページ)
- (19) Weber, 270f. (森岡弘通氏訳『文化科学の論理学の領域における批判的研究』一八二—一八三ページ)
- (20) Weber, 129f., 136 (松井氏訳、(一)一八—二〇、一三五—一三六ページ)

- (21) Weber, 217 (森岡氏訳、一〇四ページ)
- (22) Weber, 439, 553 (林氏訳、三三三ページ、阿閉、内藤両氏訳、二二二ページ)
- (23) 阿閉、内藤両氏前掲訳書、一一二ページ（阿閉氏の解説）  
林 道義氏『ウェーバー社会学の方法と構想』一〇六—一〇七ページ
- (24) Weber, 553f. (阿閉、内藤両氏訳、二二二—二四ページ)
- (25) vgl. Weber, 567 (阿閉、内藤両氏訳、四二二ページ参照)
- (26) Weber, 567 (阿閉、内藤両氏訳、四二二ページ)
- (27) vgl. Weber, 436f. (林氏訳、二八—二九ページ参照)  
林氏前掲書、六—七頁
- (28) 神山四郎氏『歴史の探究』一八九ページ
- (29) 神山氏前掲書、一五〇、一九八—一九九、二〇三ページ  
K. R. Popper, The Poverty of Historicism, 122f., 128 (久野、市井  
両氏訳『歴史主義の貧困』一八五—一八六、一九二—一九四ページ)
- (30) vgl. Weber, 166 (徳永氏訳、二五二ページ参照)

## (二) 理 念 型

### 理念型の本質と機能

前述のようにウェーバーにとっては、純然たる法則科学以外のものは、特定の主観的価値観点を手掛かりにして認識を行う科学であった。そしてこれが周知のように、「理念型」による認識として具体化される。リッケルトはウェーバーに先立って、「歴史科学」の方法が個別化であると同時に価値関係的でもあることを指摘していた。だが私が以前に他の論文で詳しく分析したように<sup>(1)</sup>、リッケルト

の思索は事実上そこで終っていたのである。文化価値による対象の特徴づけや本質的要素の選択は、詳しくはどのように行われるのかについて、彼は実質的には何も言っていないに等しい。認識手段としての理念型の構想は、方法論におけるウェーバーの大きな前進を示すものである。

彼によれば、理念型は次のようにして構成される。認識主観の特定の問題意識からみて、何らかの共通点を含む多くの個別的なものについて、それらが含む多様なものの中から、その問題意識の観点からみて重要な一定の要素だけを、それぞれの要素に付きまとう來雜物を取り去って純粋化しながら分解的に選び出し、矛盾のない形に総合する<sup>(註)</sup>。こうして得られた理念型は、問題の観点に対応する対象グループの本質像である。だが純粋化の手続きを経ているので、特定の観点に対応する「純論理的完全性」を持っており、そのままの形では実在しない「ユートピア」、「限界概念」である<sup>(註)</sup>。しかしだからと言って、それは恣意的なものであってはならず、種々の法則論的知識——経験科学が提供する法則、思考の論理的規則、日常経験の中で得られた規則など——や、日常の認識の中で鍛えられたわれわれの想像力などに照らして、「適合的」で客観的に思惟可能なものでなければならぬ。だから総合される要素相互の間には、無矛盾性、共存可能性、相互促進可能性などの関係がなければならぬ。これらは問題の観点や、上記の知識や想像力に照らしてみても、初めてその有無が判断される性質であるが、適合的で客観的に思惟可能な理念型は、具体的にはこうした性格を備えていなければならない。

(注) 分解と総合の手續きによって得られた理念型をウェーバーは「発生的概念」*genetischer Begriff*と呼ぶ。ここで発生と言うのは、分解的に抽出された純粋な要素からの構成の意味である。構成によって発生した概念というほどの意味であって、理念型の新しい性格規定になるような重要性を持つ命名ではない。ウェーバーは発生的概念の説明を二箇所で行っている。「ゼクテ」を例に取っている箇所——それは一番明快そうにみえる所なのだが——では、次のように言われている。ゼクテの発生的概念は、例えば近代文化に対して重大な文化的意義を持ったゼクテの特定の特徴だけから作られるのだ<sup>4)</sup>。

だがこれは非常に誤解を招きやすい。これだと近代文化を因果的に発生させることに貢献した要素を集めた概念だから、発生的概念と呼ばれるのだという趣旨に取られやすいからである。そうすると、理念型は何かある他のものへの因果的重要性を唯一の指導的観点にしなければならぬことになる。普通「発生的」説明と言うので、こうした誤解がなおのこと起こりやすい。だがもし理念型としてのゼクテ概念をこうした意味で発生的概念と呼ぶのなら、因果関係が逆である。ゼクテ発生の因果関係でなく、ゼクテが他のものに対して持つ因果関係が示されているからである。だからゼクテについてではなく、理念型としての近代精神について発生的概念が言われるのでなければ、妙なことになる。

近代精神に対する重要な因果的意義というのは、ゼクテを問題にする場合の可能な観点の一つを示しているだけで、理念型としてのゼクテ概念が発生的とされることと特別な関係はない。だから、理念型形成の観点は、何かある他のものへの「因果的意義いかに」ということだけだと考えてはならない。今の例では、たまたまこの観点からみて重要な要素のみが分析され、そしてこの要素からゼクテ概念が純論理的に構成<sup>5)</sup>、発生<sup>6)</sup>されただけなのである。もし発生という言葉が文字通りに取りたいのであれば、概念が純粋な形で表現したいと狙っている事態が、いかなる要素から

発生するかを示しているのだと言ってもよい。このことは、「経済交換」の理念型が発生的概念だと言われている所ではっきりする。限界効用の法則に照らして、経済的な意味で純粋に合理的な交換過程という結果を生じさせるに必要な条件ないし要因を考え出し、それをまとめ上げたものだから、それは「発生的な性格を帯びる」と言われている。

いずれにしても、発生的概念などという、紛らわしい表現を用いなくても、理念型は十分に説明できよう。研究書の中には、この表現を誤解しているのではないかと疑われるような説明をしているものが散見される。

ウェーバーによれば、現実科学の目的は、個別的事象の文化意義の認識と因果帰属であった。理念型はそのための叙述手段・発見手段として不可欠であるとされるが、それは理念型が次のような有効性を持っているからである。

(一) 理念型のように、特定の観点から構成された純粋な概念を一貫して使用することによって、叙述に一義的明確さが与えられるし、多くの対象の統一的整序が可能になる。

(二) 対象をこうした理念型と比較することによって、対象のどの要素がどんな理由で重要なかを明らかにできるし、対象の全体的な意義を捉えることもできる。

(三) 理念型は限界概念なので、対象がそれからずれているのが普通だが、それでも、どの点でどの程度ずれているかを比較によって確定でき、対象の特性がcausingって明確になる。

以上の三つは、理念型が対象の意義、特性の叙述のために有効なケースである<sup>7)</sup>。

四 理念型を構成する要素の若干が対象の中に発見された場合には、その他の要素も含まれているかも知れぬと見当をつけることが

できる。期待通りのものが発見されない場合でも、代わりに見いださるべきものの性質、タイプの推定が容易である。

(五) 理念型は何らかの因果関係を含んでいることが多いが、この種のものは因果帰属の手掛かりになる。一般に発展過程に関する理念型は、因果連関の思惟像と言えようが、これとは異質の理念型も因果関係を含むものが多い。例えば官僚制に関するものは、それが成立するための適合的条件と、官僚制が及ぼす作用（結果）についての思惟像を含む。合理的動機、目的と手段に関する合理的行為の理念型なども同様であろう。この種のものと比較によって、対象の思惟可能な多くの原因、結果の中から、適合的なものを発見したり、対象を構成すべき適合的な因果的要素を発見する手掛かりを得ることができる。もっとも、後者の場合は、形式的には四と同じ操作になる。

以上の二つは、理念型が発見手段として有効なケースである。

(注) K・R・ポパーは社会科学特有の方法を「ゼロ方法」zero methodと呼んでいる。これは対象の合理的モデルを構成し、現実の対象がこのモデルからどの程度の偏差を示すかを、後者を一種のゼロ座標として用いながら評価する方法であると言う。<sup>(7)</sup>これは理念型による対象の特性叙述と同じことになるだろう。

### 理念型をめぐるいわゆる「アポリア」の問題

どんなに単純そうにみえるものでも、それ自身の中に多様なものを含んでいるので、特定の観点からみて重要なものだけを取り出し、

それだけを研究に価する部分とみなす操作なしには、研究のしようがないが、この操作によって得られたものは、すべて理念型だとする意見がある。<sup>(8)</sup>こうした解釈を支持するまがいのようなない明文が、ウェーバーにあるか否かはどうでもよい。問題はその妥当性であるが、私はそれを認めることができない。この解釈によると、例えばビスマルクの八三年の事績の中から特定のものだけを選び出して単純にまとめ上げ、それを研究対象に限定した上で、ビスマルクという名辞でそれを指示することにした場合、この名辞はビスマルクの事績のすべてを含んでいるわけではないという理由で、理念型になる。だがこの名辞に対応するものは、ビスマルクの事績の中に、その一部として含まれており、名辞はそれを指示するだけである。一方理念型は、それに正確に対応するものを対象世界に持たないユートピアであり、それ故にこそ対象測定のゼロ座標として機能する。前者は研究対象であり、後者は研究手段である。両者は全く異質である。もし名辞ビスマルクが同時に理念型「ビスマルク」なら、両者の内容は一致するから、等しいもので等しいものを測ることになる。だがビスマルクは「ビスマルク」と瓜二つであるなどと言うのは、無意味なトリロジーであろう。だからと言って、「ビスマルク」と他人を比較して、ビスマルクでない人間は「ビスマルク」と違うなどと言っても仕方がないだろう。ビスマルクを素材にして「ビスマルクの人間」といった理念型を作れるのはもちろんだが、その内容は、今問題の名辞ビスマルクと違ってしまふ。理念型を作るには、特定の要素を取り出すだけでなく、それぞれの要素に付きまとう夾雑物を取り払い、特定の観点から純粋化しなければならぬからである。こうしてできた「ビスマルクの人間」は、ビスマルクの

ような政治的人間達のある本質像を表すユートピアとして、理念型の機能を果たせる代りに、研究対象ビスマルクを指示する機能を失う<sup>(註1)</sup>。だから、研究領域を限定して指示する名辞と理念型とは峻別しなければならぬ<sup>(註2)</sup>。さもないと、次のような問題が生じる。

(注1) 特定の問題意識からみて何らかの共通点を含む個別的対象グループの理念型はあるが、唯一の個別的対象そのものを指示する理念型はない。  
「政治的人間」、「中世都市」、「資本主義経済」の理念型はあるが、ビスマルク、中世のある時と所の都市、特定の時と場所での資本主義的経済、を指示する理念型はない。

(注2) 区別さるべきものは、詳しく言えば三つある。(一)研究対象を指示する名辞、(二)理念型、(三)名辞が指示する対象の性質が、理念型の内容と似ている場合に、理念型を使ってなされた対象規定——これらは皆同じ言葉で表される場合があるかも知れないが、論理的には別物である。ただ(三)は、今のわれわれの問題には直接関係がない。

その問題と言うのは、世良晃志郎氏が「ウェーバー科学論における最大のアポリア」と呼ぶものである<sup>(註3)</sup>。これは理念型の基礎に理論が置かれている時に生ずる。前に引いた例で言えば、「ゼクテの精神」が近代文化に重要な因果的意義を持った<sup>(註4)</sup>という理論に基づいて、それに合致する理念型「ゼクテ」が作られたような場合である。これは研究の後に初めて作られる。ところが前述の理論の基になった歴史的研究——現存した多くのゼクテについての研究——の方は、個々のゼクテのどの部分を問題にするか——つまり個々のゼクテを指示する名辞の限定された内容——を一応決めておく操作なしには不可

能である。それで、研究の前提をなすこうした限定操作によって得られた名辞が直ちに理念型とみなされ、研究の後に初めて作られる理念型と無造作に同一視されるようなことがあると、重大な問題が生ずる。まず第一に、研究は無意味な循環になる。第二に、理論の「反証」が不可能になる。なぜなら、(一)今の場合、一般に研究というものは、理念型の中を動くにすぎず、ナマの事実に触れ得ないことになるわけだから、理論を反証すべき事実が得られない。(二)もし一步譲って事実とにかくに触れることができると仮定しても、別の理由で反証できない。と言うのは、今の場合、名辞や概念はすべて理念型になるのだから、理論を表す命題の中の「ゼクテ」とか「ゼクテの精神」とかも理念型で、現実の個別的ゼクテを表すものではない。ところが理念型は、そのままの形で現存しないユートピアで、もともと事実とずれているものだから、理念型を用いた命題(理論)が、事実とのずれだけを理由に反証される可能性は全く存在しないのである。そしてもしポバーに従って、科学的命題か否かの基準を

「反証可能性」falsifiability ないし「テスト可能性」testability に置くならば、上の理論は科学的命題でなく、形而上学的命題(非科学的命題)になってしまう。こうしてウェーバー科学論の方法論的武器としての理念型が、ウェーバー科学論を崩壊させることになるわけで、最大のアポリアと言われるゆえんである。

だがこのアポリアは、研究対象を限定的に指示する単なる名辞の内容と、理念型を峻別しさえすれば、一挙に解消するだろう。前述の歴史的研究は、理論(研究成果)に基づいて初めて形成される理念型とは無関係に、名辞が指示する現実の個別的対象の特定部分に即して行われたものであるし、理論を表す命題に含まれるものも、

理念型でなく、同じ部分を指示する名辞にすぎない。だから理論は問題の特定部分を含む個々の事実による反証可能性を持っており、テスト可能である。理論に好都合な事実だけを集めるようなことさえしなければ、検証可能性に何の問題もありはしない。また研究も決して循環ではないのである。

こうした架空のアポリアを避けるためにも、(一)研究対象を限定するのに必要な観点と、(二)研究過程を導く観点と、(三)理念型を作るのに必要な観点とを区別しなければならない。(一)は研究の出発点において既に必要なものであり、またその時点で存在し得るものだが、(二)は研究の結果、初めて得られるものである。(三)はある特定の関心、例えば政治史的関心を持った主観と、一定の現象との出合いの中で固定される。「出合いの中で」と言う訳は、主観が政治史的関心を持っ

づいて、(一)の観点が新たに先鋭な形に作り変えられ、新たな研究対象の限定が行われて、新しい研究が始まることもある。これは以前の成果(三)を生み出したのとは全く別な研究で、以前の(三)を検証する意味を持つようなものではない。以前の(三)に相当する理論の検証は、これに基づいて作られた新しい観点(二)で限定されたものによってではなく、以前の観点(一)の下に包摂可能な対象グループによってしか可能でない。

ウェーバー自身はこれら三種の観点をはっきり区別しておらず、現実科学は特定の観点がなければ可能でないとした上で、これをすぐ理念型と結合するような表現が多くみられる。だが三つを混同し、しかも(三)に引きつけて考えると、上記のような架空のアポリアが生ずることになる。

#### 理念型仮説説の批判

次に理念型は仮説かどうかの問題を検討しよう。仮説とみたとき解ける箇所がウェーバーにあるし、同じ立場を取る研究者もあるからである。<sup>(1)</sup> もっとも、ウェーバーがどう考えていたかを、関係箇所について一つ一つ検討することは、大して意味がない。この問題を突き詰めて考えた上で、的確な叙述を一貫してウェーバーがやっているとは思えないし、大切なのは彼がどう考えていたかではなく、どう考えるのが妥当なのかということだけだと思うからである。今の場合まず必要なことは、次元の違う次の三つの問題をはっきり区別してかかることである。(一)理念型はその本質的機能(性格)から、仮説とみなさるべきか。(二)理念型はユートピアだと言っても、それ

が示す事柄が何らかの程度と範囲で、経験的事象の中に現れていなければ、有効な方法的概念とは言えない。<sup>(12)</sup> それである理念型がそうした意味での有効性を問われている場合には、仮説としての性格を帯びるのではないか。(三)理念型がある理論に基づいて作られている場合、一般に理論は仮説としての性格を持つものだから、その意味での仮説性は当の理念型にも及ぶのではないか。——以上のうち(二)について言えば、理念型がそうした場合に限り、仮説としての性格を帯びるかどうかということ、それが本質的に仮説としての機能(性格)を持つかどうかということとは、区別されねばならない。

(三)については、理論はもちろん仮説であろうが、理念型の基礎に仮説があるということと、理念型の本質的機能の問題とは無関係である。基礎にあるのは仮説にすぎないという事態は、せいぜい理念型の有効性にしか関係を持たないだろう。ここでのわれわれの唯一の関心事は、(一)の問題だけである。

理念型を作るには、さまざまな理論や判断が必要であろうが、出来上がった理念型自体は、理論でも判断でも命題でもなく、一定の内容を含んだ一つ概念にすぎない。そして一つ概念が、それだけで仮説になることはあり得ない。仮説であるためには、判断や命題の形を取っていなければならないからである。だから理念型は一つ概念であると言うだけで、理念型仮説を否定することができ。もっとも、因果連関に関する理念型のように、判断(因果関係判断)が理念型の単なる基礎の域を超え、むしろ内容そのものになっていると言える場合が多いので、形式的な議論だけでは十分でないと言われるかも知れない。それで、理念型の機能に即した、もっと実質的な批判をすることにしよう。

正しく作られた理念型は、比較された対象がたまたまそれと類似していても、していなくてもそれなりの仕方と叙述と発見の手段として有効に機能する。だからそれは、事実によって真偽が検証さるべき仮説ではあり得ない。もし仮説だとすれば、それに合わない対象が現われた時には、そのつど対象に合わせて理念型を直ちに修正しなければならぬが、そうなると、理念型は対象の性格測定のプロ座標としての機能を失う。ゼロ座標はむしろ事実とのずれを前提する。だからそれを仮説とみることは、それから方法的意味を全面的に奪うことになる。もっともそれは仮説と無関係ではない。ウェーバーがある所で言っているように、それは仮説ではないが、仮説の形成に方向を与えるものである。<sup>(13)</sup> ある対象を理念型と比較するとき、われわれは理念型を構成する諸要素がその中にあるだろうと予想する。この予想が仮説である。もし予想に反してそれが理念型とずれていると、仮説は直ちに修正される。そしてそのずれの原因は何か、ある要素が欠けているからには、代わりにどんな種類の要素が対象にあるはずか、といったことが、理念型を手掛かりにして容易に推定できる。そしてこれが新しい仮説となる。だから理念型は仮説でないが、その形成に方向を与えたと云ったとき、ウェーバーは事態を正しくみていたと言えらるだろう。だが彼は別の所で、<sup>(14)</sup> 理念型は仮説として機能すると主張したため、仮説を自然科学的なものと理念型的なものに区別することを余儀なくされている。それによると、自然法則的仮説は普遍妥当性を要求するので、唯一つの事実によって反証されただけで直ちに崩壊する。理念型仮説の方は、経験的妥当性しか要求しないものだから、たまたま妥当しないケースがあっても、それだけですぐに崩壊することはない、と言うの

である。だがこうした区別は、理念型を仮説とみない正しい立場からすれば、全く無用なものであらう。自然的事象に関する理論（仮説）と、人間の事象に関する理論（仮説）とは、要求される妥当性の程度に違いがあるかどうかは、検討されてよい問題ではあっても、理念型と切り離して扱われるべきであらう。

### 理念型による認識の「客観性」——ウェーバー科学論の難点

理念型は、正しく作られたものであっても、ユートピアであることに変わりはないので、対象との一致という意味での客観性を持つことはない。しかし認識のゼロ座標として有効に機能するとすれば、対象自身の特性を照らし出しているはずである。だから理念型は対象と一致することはないけれども、その特性を照明し得るという意味で、機能的に客観性を持つことができる。それなら、そのためには、(一)理念型を構成する要素は、純粋化されない形においては、対象グループの中に多かれ少なかれ初めからあったものでなければならぬし、(二)理念型を直接規定している観点や、その基礎にあるもっと一般的な研究観点、問題意識も、対象自身から汲み取ることのできるものでなければならず、ただ単に主観的なものであってはならない。(三)に属するものはウェーバーが言うように、時代により、社会により、文化の性質によって異なるだけでなく、人によっても異なるという意味で、確かに主観的性格を持つてはいる。<sup>15)</sup>しかしこの観点に対応するものが——あるいはこれを喚起するものが——対象の中に全くないなら、それに基づく研究は無意味で実りのないものであらう。その意味で、自発的に抱かれた主観的観点も、それ

が研究観点であり得る限りは、対象自身から汲み取ることのできるものという制約を離れ得ない。このことは、例えば政治的観点とか、芸術的観点とかのように、研究の大前提をなす、主観が全く自発的に設定する一般的観点でも同じことだが、研究の進行過程で出て来る、もっと限定された問題意識としての観点の場合には、一層はつきりするだろう。また理念型の構成を直接規定する観点——例えば特定の理論——はなおさらである。理論は事実による検証に耐える、客観的なものでなければならぬからである。これら一連の観点は、前にも言ったように、特定の価値関心や問題意識を持った主観と、特定の性質を持った対象との出会いの中で初めて固定されるものがあり、その意味で「主観的—客観的なもの」でなければならぬ。単に主観的なものは、研究観点としては無意味である。主観的—客観的な観点であってこそ、それに応ずる特定要素を対象グループから取り出すことによって、理念型を構成することができる。またこうしてできた理念型であって初めて、対象グループと関係し、その特性を照明することができる。こうした観点や理念型は一面的なものにすぎないが、対象の一面だけは捉えることができるという意味で、客観性を持つと言えよう。だから「観点・理念型」Aによって、対象の多様の中から特性aが照明され、「観点・理念型」Bによって、特性bが照らし出される。こうした一面的認識の積み重ねによって、多様な特性と、それを照明すべき「観点・理念型」とが平行して次第に汲み尽くされていく。そこにユートピア概念に基づく現実科学的認識の、完き客観性に向かつての進歩がある。

だがこうした考えが、ウェーバーの忠実な解釈と言えるかどうかは疑問である。なぜなら彼の思想には、リッケルトから継承したカ



ント的構成主義への強い傾向が認められるからである。現象はそれ自身としては無意味なカオスであり、それが意味を持てるのは、研究主観がそれを現象に外から与えるからにすぎない。主観が主観的関心を携えて現象にアプローチし、これと関連づけることによって、関心に対応する意味が初めて現象に与えられるとみるのが、ウエーバーの構成主義である。こうした立場では、価値関心も対象の意味もすべて主観的なものであって、対象に規制されるようなものではない。だから価値関心に導かれた認識が対象自身のある性質を照明するという解釈が入り込む余地はないことになる。もっとも、ウエーバーは常に構成主義的だったわけではない。その傾向がはっきり出ている『社会科学及び社会政策的認識の〈客観性〉』（以下『客観性』論文と略記）でも、構成主義的な所と、そうでない所とがあつて、一貫していない。一般的傾向としては、認識の前提となる主観の価値関心や、対象の意義について論ずる場合は構成主義的<sup>(16)</sup>で、理念型を扱う時はそうでない<sup>(17)</sup>と言えるが、例外もある。ウエーバーは恐らくこの問題を突き詰めて考えることをしなかったのであろう。いずれにしても、構成主義的に考えるときの彼にとっては、われわれが一般に文化事象と呼ぶものも、それ自身としては無意味な多様であつて、「文化」ではなかった。われわれが特定の文化価値を携えて近づき、これと関係ありと認めた特定部分だけが「文化」になるのである。だがこうした考えは、前述の「行為の意味解明的科学」の思想と矛盾する。人間の行為は思念された主観の意味によって導かれるものであった。人間的事象（文化事象）はこうした行為とその結果の複雑な連関である以上、それ自身において多様な意味に満ちており、決して無意味なカオスではない。そこに人間的事象と自

然的事象の違いがある。文化的認識主観にできることは、無意味な多様に主観の意味を任意に与えて、「文化」にすることではなく、意味に満ちた文化事象の中から、自分の問題意識に対応するものだけを、自分にとつての研究対象という意味を持ったものとして、抜き出すことではない。研究対象を限定する操作、研究対象という意味を与えるにすぎない操作を、文化価値付与による、非文化的なものの文化構成操作と混同し、また、人間的事象と自然的事象を混同したものこそ——あるいは、混同したと疑われるような叙述をしたものこそ——ウエーバーの構成主義である。私は前に、研究対象の単なる限定と、ユートピアとしての理念型構成とを同一視する誤解が、ウエーバー研究者の一部にあることに触れておいたが、これはウエーバー自身の構成主義的叙述法にも相当な責任がある。彼は行為に関する現実科学の思想によって、科学区分論ではリッケルトを遙かに越えているけれども、もっと踏み込んだ方法論では、彼の悪しき影響を十分に克服できないでいるようにみえる。そのため理念型を問題にする所では構成主義的でないにもかかわらず、理念型による認識の客観性の意味を正確に捉えることができなかった。一面的な理念型の不断の積み重ねによって、科学の進歩が可能になることを強調しているが、<sup>(18)</sup>「観点・理念型」Aで対象の特質aが、Bでbが明らかにになるという形で、客観的認識の不断の進歩が可能になるとは言っていない。『客観性』論文でウエーバーが認識の客観性について言えたことは、それは主観的なものに基いてしか可能でないような種類のものだという、極めてネガティブな言明でしかなかった。主観的なものに基づく認識が、いかにして、いかなる意味で、客観的であり得るかについて、ポジティブには答えられてい

ない。認識の基礎にあるのが主観的—客観的なものであることが洞察されず、単に主観的なものとされている限り、認識の客観性の問題は、ポジティブには答えられない問いであろう。繰り返して言えば、正しい洞察を妨げたものの、それがカント的構成主義である。この立場に立った解釈は、あつた通りのウェーバーの解釈としては妥当な面があるとしても、科学論の主張としては誤りであろう。

（注）『客観性』論文の最初の方で、科学的認識と価値判断の異質性が論じられているが、後者の排除は科学的認識獲得の前提条件にすぎない。それだけでは、認識の客観性もその科学的説明も、まだ与えられていないのである。僅かに論文の中ばあたりで、主観的なものに基づく認識でも、研究手段は「思考の規範に拘束される」から、研究成果の方は、基礎にある価値観点に関心を持たぬ人にも妥当する、という意味のことが言われているのが、客観性のポジティブな説明とおぼしき唯一の箇所である。だがそうした指摘にもかかわらず、論文の終り近くでウェーバーは、社会科学の認識が主観的価値理念に基づくこと、一面的であること、その妥当性に限界があることを自覚せよ、と強調しだすのである。だからこの論文の主眼は、社会科学の認識が主観的なものに基づくことを力説する点に重点が置かれていると言える。論文の題目からみて、議論の中心に据えらるべきは、そのものがそこになく、かえって逆の主張が置かれているようにみえるところから、この論文の与える印象の奇妙さが生まれる。

安藤英治氏は「マックス・ウェーバーにおける『客観性』の意味」と題する論文で、ウェーバーの方法論論文が一般にそうであるように、『客観性』論文も「具体的なボレミクであつた」と述べているが、これは貴重な指摘である。なぜなら、この論文が読者に与える印象の奇妙さは、論文の狙いが、客観性は主観的なものと無関係だという当時一般的だった考え方と対決する点にあつたことを知ることによってしか、解消されない

と思うからである。

だがそれにしても、主観性に基づくものが、いかにして客観的であり得るかを、議論の中心に据えることなしに論争するのは、やはり奇妙なことである。この論文に顕著な構成主義の下では、問題が解けないと思われるだけに、その印象を深くする。この論文がボレミクのためのものであつたことが、もともと彼にあつた構成主義を殊更に強調させ、彼を袋小路に追い込むことになつたのではなからうか。いずれにしても、認識がいかにして客観的であり得るかを、科学論のレベルで本格的に論じない限り、『客観性』の意味は、安藤氏の上記論文での努力にもかかわらず、少しも解かれていないと私は考える。

最後に、ウェーバーを極端な主観的構成主義に走らせた原因の一つと思われるものについて触れておきたい。それは彼が「文化の時代の宿命」と呼ぶ事態の洞察である。ヨーロッパの合理化によって、キリスト教の一義的価値観が衰え、文化の諸価値の自律化——価値における神々の闘争——が生ずるとともに、現世はキリスト教から与えられていた普遍的で他律的な秩序と意味を失つた。人々が自律化した諸価値のどれを自己の生活の究極の拠所を選ぶかは、各自の良心に任される。各自は自己の生と現世の全体を、自分が選んだ主観的価値によって秩序づけ、意味づけねばならない。それが合理化された文化の時代に生きる人間の宿命である。『職業としての学問』や『世界宗教の経済倫理 中間考察』などで展開されるこうした思想が、科学論の基礎にあることは、『客観性』論文にもよく現れている。そして実はこれが彼を構成主義に駆り立てた一つの原因だったのである。そのことは『客観性』論文で、価値や文化意義を論じた箇所に構成主義が顕著であることから推察できる。無意

味化した、現世を、主体的に選ばれた主観的価値によって有意味的に構成しつつ生きることの実践的要請が、それとは次元を異にする科学論にまで影響することによって、構成主義が助長されたのではなからうか。だが、現世の無意味化ないし普遍的意味の喪失を、主体的実践による意味づけで超えようとする実践的エトスの問題が、科学論の内容にまで影響したとすれば、一部のウェーバー解釈者の意見とは逆に、科学論にとって不幸な事態だったと私は考える。科学は合理的文化の時代の所産であるが故に、そうした時代の人間の宿命と無縁でないだけでなく、宿命に耐える文化人の存在こそ、「文化科学の超越論的前提」<sup>(22)</sup>であるとウェーバーは信じた。一部の解釈者もまた、科学論とこうした歴史意識の関連を強調し、そのユニークさを称賛する。だがこうしたユニークさは構成主義を助長させ、科学論に余分なものを持ち込む結果になっている。科学論はそうしたものから、もう一步「合理化」されねばならないのではないか。これを「観点」の問題に関連させて言えば、科学的認識を導く研究観点と実践的価値観点とは、峻別されねばならないということでもある。価値における神々の闘争の時代にあつては、後者は主観的であり得ないにしても、前者はそうした現代的状況とは全く無関係に、私が言う意味で主観的―客観的であり得るし、またそうでなければ、研究観点としては無意味であらう。それにもかかわらず、後者が無造作に主観的とされてしまうのは、彼が価値を専ら時代の宿命の中での主体的実践との関連で捉えていたからである。彼はこうした実践のレベルでみられた価値しか知らなかった<sup>(23)</sup>ので、リッケルトに倣って現実科学を価値関係のと考えたとき、研究観点と実践的価値観点との混同が直ちに生じたのである。だがわれわれはもう少し

批判的になって、ウェーバーが要求した価値判断と科学的認識の区別に似たことを、二つの観点にも適用しなければならない。経済的にも政治的にも法律的にも扱える内容を持った対象を、ある人は経済的観点から、他の人は政治的観点から、別な人は法律的観点からアプローチするということは、文化の時代の宿命とは無関係に存在し得る事態である。どの価値観点から対象を科学的に分析するかということと、どの価値を自己の生活の究極の拠所にするかということとは、全く異質の問題であらう。一部のウェーバー解釈者が両者を峻別する必要性に全く気づいていないようにみえるのは、驚くべきことである。リッケルトは客観的で絶対的無時間的な価値体系の存在を信じ、歴史科学的研究を導く価値観点をこれと結合することによって、科学の客観性を確保しようとした。これに対して、神々の闘争という時代の宿命を冷徹に直視したウェーバーは、価値の徹底的な主観性の自覚の上に科学を立てようとした。そこにウェーバーの前進があり、時代の状況への彼の誠実があると言われる。だがこうした解釈は、彼が研究観点と実践的価値観点を混同した事実<sup>(24)</sup>に気づかぬだけでなく、かえってそこに彼の誠実をみていることになるであらう。こうした奇妙な解釈を避けるためには、科学論をもつとエトス論や主体の問題と切り離して取り扱わなければならない。これが密着しすぎていることは、彼の科学論のユニークさではあつても、長所であるとは限らない。

(1) 拙稿「リッケルトの歴史哲学」一六一―一八ページ

(2) Weber, 191, 194, 200 (徳永氏訳、五二、五五、六二ページ)

(3) Weber, 184, 192, 194 (徳永氏訳、四四、五三、五五ページ)

- (4) Weber, 194 (徳永氏訳、五五一五六ページ)
  - (5) 林氏前掲書、五三二ページ参照
  - (6) Weber, 202 (徳永氏訳、六四二ページ)
  - (7) K.R. Popper, op. cit., 141 (久野・市井両氏訳、二二二—二二三ページ)
  - (8) 世良晃志郎氏『歴史学方法論の諸問題』一一八、一二四—一二五ページ
  - (9) 同書、一三六—一三七ページ
  - (10) K.R. Popper, *Conjectures and Refutations*, 37
  - (11) Weber, 129-131 (松井氏訳、二一九—二二三ページ)
  - (12) 世良氏前掲書、一二七ページ、注<sup>3</sup>
  - (13) vgl. Weber, 549f. (阿閉・内藤両氏訳、一八一—一九九ページ参照)
  - (14) Weber, 190 (徳永氏訳、五一二ページ)
  - (15) Weber, 131 (松井氏訳、二二二—二二三ページ)
  - (16) Weber, 183f., 206-208, 261f. (徳永氏訳、四四、六八—七〇ページ、森岡氏訳、一七〇—一七二ページ)
  - (17) Weber, 161, 175, 178, 180 (徳永氏訳、二〇、三五、三八、四〇—四一ページ)
  - (18) Weber, 162, 181 (徳永氏訳、二二、四一—四二ページ)
  - (19) Weber, 206f. (徳永氏訳、六八—六九ページ)
  - (20) Weber, 183f. (徳永氏訳、四四—四五ページ)
  - (21) 安藤英治氏『マックス・ウェーバー研究』一一三—一四一ページ
  - (22) 同書一五一—一五二ページ参照
  - (23) Weber, 180 (徳永氏訳、四〇—四一ページ)
- 拙稿「マックス・ウェーバーにおける西欧の合理化と知的誠実」(『金沢大学教養部論集』十二巻所収) 第一—三節参照

### (三) 歴史認識の方法

#### 「歴史的事実」の決定——価値解釈

ウェーバーによれば、歴史学の仕事は文化的に重要な個別的事象の因果分析と帰属である。これは「具体的結果を具体的原因へ帰属させること」とか、「現実的な従って個性的な形態を個性的な連関において捉えること」とか、「個性的状況への帰属」とかと言われているように、単なる因果帰属でなく、個別的なものを個別的なものへ帰属させる、個別的因果帰属である。社会のさまざまな個別的現象を全体的に規定する、法則的關係を含んだ種々の構造連関のような一般的なものは、原因とはみなされない。ウェーバーの歴史学にとって、個別的事象が帰属すべき原因は、常に個別的なものでなければならず、一般的なものは因果帰属の単なる手掛かりにすぎなかったことを、まず初めに強調しておきたい。(このことの問題性は第五節で取り上げる。)

ところで、個別的因果帰属は歴史的説明 *historische Erklärung*、因果的説明 *kausale Erklärung*、因果的説明 *kausale Deutung* などとも呼ばれるが、<sup>(2)</sup> こうした作業に対して、ある事象の重要性を認めることによって、因果的説明の出発点を定め、研究対象を設定する作業は価値解釈 *Wertinterpretation*、価値分析 *Wertanalyse* と呼ばれる。<sup>(3)</sup> これによって研究に価する重要な事象と認められたものは、第一次の歴史的事実ないし歴史的個体 *historisches Individuum* と呼ばれ、因果的説明によってそれが帰属さるべき實在根拠とされたものは、第二次の歴史的事実ないし歴史的原因と呼ばれる。<sup>(4)</sup> 前者の意義はそれ自身の固有性に基づくが、後者の意義は他のものの

実在根拠である点にしかない。<sup>(注I)(注II)</sup>

(注I) 歴史研究では二つの歴史的事実、つまり歴史的個体と歴史的因が重要性を持つが、それ以外のものも、認識手段として副次的に重要性を持つことがある。それは(一)歴史的事実の認識手段として役立つか、(二)因果的解明の手掛かりになる法則的類型的なものを認識する手段として役立つかする場合である。ウェーバーによれば、歴史研究で重要性を持つものは、以上の三種に限られる。

なお、歴史的個体はそれ自身の固有性において評価され得るものでありさえすればよいのであるから、現代のものでなくともよいし、現代に因果的意義を持たないものでもよい。歴史は常に現代の価値関心から書かれる。だがウェーバーによれば、現代に因果的意義を持たない過去の事象を、その固有性の故に評価し、そこから歴史研究を出発させることができないほど、現代の価値関心は狭隘ではない。<sup>(5)</sup> もっとも、現代と無関係なものへの関心は、そうでないものへの関心に比べて見劣りすることは否めない。<sup>(6)</sup>

(注II) ある事象が歴史研究の直接的対象——歴史的個体——になるか否かは、それが他のものに対して重要な歴史的影響を持つかどうかによってではなく、それ自身が固有の価値を持つかどうかによって決まるというウェーバーの見解は、一応注目してよいものだろう。事象の重要性を歴史的影響性に置き換え、後者を現代への影響から測る通俗的な見方では、古代史、中世史研究の意義の説明が難しいが、ウェーバー理論ではそれが容易だからである。だが価値解釈による固有価値の把握だけで、研究対象が決まることはあり得ない。固有価値を持つ事象は無数にあるし、固有価値の内容は不変なはずなのに、研究対象になるのは特定のものに限られ、また人により時代によっても違うからである。価値解釈による固有価値の発見に、主観の価値関係の態度決定が付け加わって初めて、対象が決まる

のである。そして後者は更に歴史家の広い意味での歴史観(問題意識や価値意識)によって規定されたいと言えよう。だから現代に対して明確な因果的意義を持たないという意味で、現代と無関係なものへの関心も、今日の歴史観という現代的関心に支えられてしか存在しないのである。

また歴史的事象は特定の時間と空間に孤立してあるのではなく、一定の発展系列の中にある。だから歴史観からみて、重要な統一の意味を持つと考えられた連続的な因果連関としてのある特定の「発展」こそ、研究の直接的対象であり、個別的事象はその中に位置を持つことによってのみ、研究のそのつどの一時的対象となるにすぎないであろう。<sup>(7)</sup> (こうした問題については、後に改めて論ずる。)

前述のように、価値解釈が目指すのは対象そのものの固有性であって、歴史的影響性ではない。それが目指す固有の価値は、歴史的因果的意義の彼岸にある。われわれはマルクスの『資本論』を、その因果的意義を別にしても、同種の問題に関する他の思想体系との対比によって、思想的固有性において評価し得る。<sup>(8)</sup> だから価値解釈はもともと歴史研究ではないのだが、研究対象を決定して課題を提出する機能を果たすところから、結果的に歴史研究にかかわって来るのである。だが研究対象の決定は、ウェーバーでは普通「価値関係的」操作と呼ばれている。それなら価値関係と価値解釈は同じなのであろうか。彼は、『社会学的及び経済学的科学の《価値自由》の意味』で、両者を区別しているようにみえるが、その違いははっきりしない。その際は彼は詳しいことは、『文化科学の論理学の領域における批判的研究』(以下『批判的研究』と略記)を参照するよう指示しているが、この論文でも、『ロッシヤとクニース』でも、違いはやはりはっきりしない。価値解釈とは対象が価値との関係におい

て持ち得るすべての「可能的価値関係」を理解することだと言われているからである。<sup>(9)</sup> こうしたなかで、両者の区別を明確にしたのは小倉志祥氏である。<sup>(10)</sup> 氏は『批判的研究』でも『ロッシュャーとクニース』でも、「価値関係と価値解釈との厳密な区別を求めることはできない」としながらも、前者は主観的なものとどまるが、後者は「没主観的」に「客体そのものの意味内容」に「帰依」することを目指すとして、両者をはっきり区別する。確かにウェーバーも価値解釈について、それは対象が含む意味内容を「汲み尽くそうとする解釈」であり、対象の中に「具体化されあるいは実現」されている価値内容を「追体験」的に「解釈することだ」と述べている。<sup>(11)</sup> だから、自己の主観的価値観点を携えて外側から対象にアプローチする操作を価値関係と解するなら、対象自体に内在するあらゆる価値を没主観的に汲み取る操作は、価値関係と峻別可能となろう。一方は主観的、他方は没主観的と言える。

小倉氏の解釈は恐らくウェーバーの真意に沿うものであろう。だが私の唯一の関心事は、彼の真意などではなく、その客観的妥当性にある。しばしば繰り返えて来たように、価値関係の問題設定操作は、特定の価値関心、問題意識を持った主観と、特定の性質を持った対象との出合いの中で固定されるものであるから、単に主観的なものではなく、主観的—客観的なものである。これは対象が含む種々の特性の一つに研究を固定する操作であるから、価値解釈を離れては存在しない。逆にまた手掛かりなしに対象の意味内容を汲み尽くすことはできないから、価値解釈が可能なためには、主観が価値関係を導く種々の価値観点——研究に際して、実際には取るつもりのないものをも含めて——を携えて対象にアプローチし、それに応ず

る特性があるかどうかを一つ一つ検証しなければならない。だから、価値関係のアプローチなしに価値解釈は不可能である。価値解釈は、対象の特性に照らして可能な数だけの価値関係の積み重ねにすぎない。だからウェーバーがこれを「可能的価値関係」と呼んだのは、正確な表現だったのである。対象に内在する多様な可能的価値関係の中から、主観の問題意識によって一つのものが現実的価値関係として選ばれたとき、有効な研究観点が成立する。だから価値解釈と価値関係の間に、没主観性と主観性の対立を認めるのは難しい。あるのは可能的と現実的、複数と単数の違いだけである。だからウェーバーの叙述の中に、両者の厳密な区別が見当たらないのは当然と言える。そして価値解釈の説明に際して、彼が構成主義的発想を捨てていることは注意してよい。それは対象に含まれる意味内容を汲み尽くすことであって、無意味なカオスの現象への主観的意味付与ではない。対象はそれ自身において意味に満ちたものとみられているのである。こうした価値解釈が「可能的価値関係」とされていることは、価値関係の対象決定操作が、単に主観的なものではなく、客観にも根差すこと、その構成主義的解釈が誤りであることを、示している。私が小倉氏の解釈にこだわるのは、価値関係を単に主観的なものとみることによって、構成主義的理解が忍び込むのを警戒するからである。もっとも、幾つかの可能的価値関係の中から何を現実的価値関係として選ぶかは、人により時代によって異なるという意味で、それを「主観的」と言うのなら、価値解釈の方は比較的に「客観的」ないし「没主観的」と言える。だがこの意味での主観性は、前述のように客観とのかかわりを排除しないことを忘れてはならない。理論的認識の価値観点と、対象世界との内的関連が特に問

題にならない実践的価値観点を同一視し、理論的認識に構成主義を忍び込ませる解釈があるだけに、主観性という言葉の多義性に注意が必要であろう。

### 因果帰属の方法

歴史科学は対象をその固有性において因果的に説明しなければならぬが、対象を含む無限の要素と、それを現にあるように生起せしめた無数の要因を漏れなく再現することは不可能なばかりか、無意味でもある。だから(一)特定の問題意識からみて本質的な意味を持つ構成要素に研究を限定する操作と、(二)この要素を生起させた無数の要因の中から、因果的に特に重要な意味を持つものだけを抽出して、これに問題の要素を帰属させる操作が必要である。(一)についてはしばしば触れて来たので、ここでは(二)のみが問題である。

現実の因果連関では、無数の要因があつた通りの仕方ではあるが、それらの要因がすべて知られているわけではない。だからわれわれは問題の構成要素に關係するものの中から、史料に基づいて確認でき、かつ問題意識からみて必要と思われる諸要因をまず選び出さなければならぬ。あるいは、問題の構成要素に先行する事件や状況——これらは当の要素の原因複合体とみなされる——を幾つかの要因に分解しなければならぬ。次にこれらの要因の中から、ある一つのものだけを抜き出し、それ以外のものを一括して不変の因子・条件とみなす。次にこの分離された一つの要因がもし存在しなかったか、あるいは実際と違った在り方をしていたと仮定した上で、事実と違

うこうした条件から、どんな結果が生ずるかを想像してみる。想像された結果が、問題の構成要素と本質的な点で違っていない場合には、分離された当の要因は取るに足りない原因だったとみることができ、逆に違っているときには、不可欠の要因とみることができる。前者は「偶然的 zufällige 原因」、後者は「適合的 adäquat 原因」と呼ばれる。こうした操作を取り出された一つ一つの要因について繰返し、その結果を比較すれば、考察された要因を二種類の原因に振り分けることができるし、また適合的原因の適合性の度合い——問題の要素の生起を助成した度合い——をかなりの確実さで査定することができる。

(注)一八四八年三月革命当時のドイツの社会的政治的状况は、革命が起こる可能性を十分に孕んでいたとしよう。そして革命のきっかけになったベルリンの夜の二回の射撃がもしなかったと仮定しても、革命が避けられたと想像することが難しく、何か別の偶発事件をきっかけにして革命がやはり起こっただろうと推定できるなら、この射撃は偶然的原因とみなされる。これは革命勃発の時期、その他革命の非本質的事態を規定したにすぎない。これに反して、当時のドイツの状況は革命の適合的原因とみなされよう。こうした状況がなかったとすれば、革命が高度の確率で回避できたと思像されるからである。

またベルシア戦争以後のギリシア文化の発展には、二つの可能性があったと推定できる。一つはベルシアが勝つことによって、ギリシアの密儀と神託にその萌芽があつた神政的宗教的文化が、戦勝国ベルシアの庇護の下で発展する可能性であり、一つはギリシアが勝つことによって、現世的で自由なギリシア文化が発展する可能性であつた。二つの可能性に決着をつけたのがマラトンでのギリシア軍の勝利だったとすれば、これ

はギリシアの現世的文化発展の適合的原因とみなされる。もしギリシア軍が敗れていたとすれば、現にあったのとは本質的に全く違った結果が生じたと思像されるからである。<sup>(16)</sup>

もし歴史におけるある要因が、現実にあったものとは異なっていたと仮定すれば、次の出来事の経過はどのように変わる可能性が客観的にあったと思像できるかの判断——これは市井三郎氏が「反事実的条件命題」と呼ぶものだが<sup>(17)</sup>——をウェーバーは「客観的可能性判断」ないしは単に「可能性判断」と呼ぶ。<sup>(18)</sup>これは存在論的知識 ontologisches Wissen と法則論的知識 nomologisches Wissen の二つを手掛かりにして行われる。前者は史料によって確認できる歴史的事実についての知識であり、後者は生活経験の中で得られた経験規則——例えば人間はある状況に対して、ある特定の反応を示すのが普通である、といったこと——の知識である。マラトンの戦いの例で言えば、ギリシアには自由で現世的な精神があった反面、神政的宗教的文化の萌芽もあったこととか、ペルシアが被征服民族の宗教を尊重して、異民族支配の手段にしたことなどが、存在論的知識である。これに対して、人間はある状況で成功した方策を、その後の類似した状況でも繰り返し取ろうとするものだ、といった知識が法則論的知識である。もしペルシア軍が勝ったとすれば、ギリシアの現世的文化の発展は期待できなかったという判断は、われわれの想像力がこうした法則論的知識に存在論的知識を「はめ込み」<sup>(19)</sup> einfügen 「適用する」ことによって生ずる。だから既知の法則論的知識にうまくはめ込めるような存在論的知識を持っていなければ、判断ができない。換言すれば、判断の対象となる要因は、こうした

はめ込みの可能なものでなければならぬ。だから事件や状況を史料に即しつつかの要因へ分解する場合の分解程度の適、不適の基準は、何らかの経験規則へのはめ込み可能性である。

事実と異なる可能性を問うことは、因果帰属の歴史叙述にとつて避けることのできない操作である。「なぜこうなったか」、「何が原因か」を確定したり、ある原因の重要度を評価するためには、「もしそれがなかったとすれば、どうなったであろうか」というように、仮定に基づく結果の可能性を問う形を取らざるを得ない。原因とは「充足理由」であり、それがなければこの結果ではなく、別の結果が生じたと考えられるものである。<sup>(20)</sup>だからある原因が事実と違っていたと仮定すれば、結果は必ず違って来るはずである。結果が果たして違って来るか、違い方が大きい小さいかを想像してみることによつて、本当の原因か、重要な原因かが推定される。客観的可能性判断はこうした方法上の操作であるから、歴史の非決定論的見方とは何のかかわりもない。両者は次元を異にする。<sup>(21)</sup>

（注）歴史の見方と無関係なはずの客観的可能性判断理論も、ウェーバーの場合には、特殊な歴史観を含意していると言えるかも知れない。彼は前述のように、個人の行為を導く主観的意味が歴史的因果連関の一環として機能し得ると考えていた。こうした点から歴史をみるのは、一つのアプローチであり、一面的であることを自覚しながら取られる方法論上の立場にすぎない。だがこれは結果的に主体的実践が歴史において果たす役割を過度に重視し、主体に影響する客観的一般的なものの機能を不当に軽視する歴史観に、ウェーバーを導いていったものではあるまいか。歴史認識の使命を個別的因果帰属とみる見方を支えているものの一つは、こうした歴史観であろう。それは主体の意図や実践のいかによつて、異なった経



過を辿る複数の可能性を歴史が事実上常に孕んでいるという主張に傾くであろう。客観的可能性判断理論は、ウェーバーの場合、こうした個体主義的非決定論的歴史観を含意しているのではなからうか。だがわれわれは後に第五節において、歴史が柔らかな意味で必然的と言つてよいような動きをすることがあること、それを認めたかといつて、主體的なものなしに歴史は動かぬことを否定することにはならぬこと、客観的可能性判断は、歴史がこうした動きをする場合にも適用できることを示すであろう。

ところで、適合的原因とは、ある結果と「うまくつり合う」関係にある原因という意味であり、偶然的原因とは、「うまくつり合わない」原因という意味である。換言すれば、前者は不可欠的原因、後者は取るに足りぬ原因である。この場合、偶然的に対するものが必然的でないのはなぜであらうか。ウェーバーはその理由を明示していないけれども、われわれはその理由を、(一)経験規則の妥当性に限界があること、(二)存在論的知識に限界があることの二点に求めることができる。第一の理由について言えば、可能性判断は経験規則に依存するが、これは経験から帰納された蓋然的知識にすぎない。一つ一つの現実は無数の原因の組み合わせなので、あらゆる現実に必然的に妥当する命題を経験から汲み取ることとは不可能である。「従来の経験からみて、一般に人間はある状況に対して、ある反応をするのが普通である」と言えるにすぎない。第二の理由について言えば、可能性判断は既知の条件のみを頼りにして可能的結果を推定する。だが仮定された変化がもし現実起こっていたとすれば、それと同時に種々の随伴現象が生み出されて、推定される可能的結果に影響しなかったとは限らない。だから起こり得べき結果についての必

然的判断を得るためには、生起可能なあらゆる未知の随伴現象を全部枚挙し、可能的結果へのその影響の有無を論証しなければならぬ。この場合、論証に必要な経験規則の蓋然性もさることながら、史料の問題はもっと大きい。仮定の事実の生起に随伴したかも知れない事象の存在を実証する史料など、あるはずはないからである。だからこれは架空で奇妙な議論とならう。要するに可能性判断について必然性を言うことはできないから、必然的原因も問題にならない。抽象的に一定の条件を設定したとき、ある要因と結果との「つり合い」の関係はどう判断すれば、一般的経験規則に抵触しないかを、蓋然的に言えるだけである。

適合的—偶然的の区別は、認識主観の問題意識からみた本質的構成要素に対する「因果的意義」の区別であるから、問題意識と構成要素に相対的—ないし相関的—で、固定したものではない。同じ一つの要因が、基準になる問題意識と構成要素の違いによって、偶然的原因になったり、適合的原因になったりする<sup>(23)</sup>。だからこれは實在的因果連関自体に内在する「客観的因果性」の区別ではない<sup>(23)</sup>。このことが見落されると、ミルなどのような擬人的歴史観に近づくことになる。これは人間の行為において体験される「動機の争い」という現象を、因果性理論や歴史の過程に擬人化的に適用するものである。それによると、ある結果を招来しようとする *herbeiführend* 諸原因と、阻止しようとする *verhindernd* 諸原因とが客観的に実在して争っており、両者の強さは数学的確率で表すことができ、強さの比率は二つの確率の商で示される。歴史の過程はある結果を招来しようとする原因群が阻止しようとする原因群を押しつけ、優勢になっていくプロセスとして描かれる。「すべてが特定の結果に向かって押

し寄せる」という意味での「発展傾向」とか、発展の「推進力」や「抑制力」について語るのも、似たようなものと言えよう。<sup>(24)</sup>こうした立場は誤った擬人的実体的法則史観に陥りやすい。歴史は次々に何らかの結果を生み出していくものなので、阻止するものに常に打ち勝って進む「必然的發展傾向ないし法則」といったものが考えられやすいからである。だがウェーバーによれば、招来原因と阻止原因の区別や争いが、実在的因果連関それ自体に内在することはない。ある事象の生起にかかわったすべてのものが、それなしには事象が生じ得なかった条件だからである。ある結果の適合的原因、それを招来しようとする原因、推進力——これら類似の表現は、個別的因果帰属のために抽象的に分離されたものの、認識論的評価の表現形態であり、客観的存在論的区別ではない。

### 因果帰属判断の「客観性」とその難点

ウェーバーは『批判的研究』で、研究対象である歴史的個体の限定は価値関係に基づくので主観的だが、それについての因果帰属判断は「経験に基づく真理 *Erfahrungswahrheit* として客観的に妥当すること」を「原理的目標」にすることができると言っている。<sup>(25)</sup>だから可能性判断理論は、『客観性』論文で放置されたままになっている問題——主観的なものに基づく認識がどうして客観的でありうるかの問題——に、歴史認識の分野で解答を与えようとしたものとみることができよう。価値観点、問題意識を単に主観的とみて、主観的——客観的とみない傾向の強いウェーバーは、可能性判断を導く価値観

点と、その上に立つ判断自体とを区別し、前者は主観的でも、後者は客観的であり得るとすることによって、問題を解こうとしたのであろう。

可能性判断は存在論的知識と合致する要因を、法則論的知識にはめ込むものであるから、その客観性はこれら二つの知識に基づく。まず存在論的知識と合致するものは、客観的事実との合致という意味で客観的であり得る。だがこの意味で客観的なのは、個々の要因だけであって、判断ではない。判断自体の客観性は、法則論的知識、つまり経験的規則に依存する。これは従来の経験から帰納されたものとして、一般的経験への蓋然的妥当性を持っているから、これに正しく依存して行われた可能性判断もやはり同じ性質を持つ。そして一般的経験に蓋然的に妥当するものは、対象である特殊なケースにも、蓋然的に妥当すると推定し得るから、判断自体も個々の要因と同様に、客観との合致という意味での客観性を持つことができる。<sup>(26)</sup>——もっとも、以上はわれわれの解釈にすぎず、ウェーバー自身が明文の形でこうした議論をまとめているわけではない。

(注) 客観的とか客観性という概念はかなり多義的に使われるが、厳密には(一)主観の特殊な条件から離れて、対象そのものに属すとみられるもの、何らかの程度において、対象と合致ないしそれを反映するものを意味するか、(二)個々の心理的経験的意識からは独立した、認識の超越論的制約としての悟性的意識に妥当し、従ってまたこうした意識を持つすべての人々に普遍的に妥当するものを意味するか、のいずれかであろう。客観的認識は意識一般の法則的条件に従って、経験素材から対象が構成されることによつて可能になると考える批判的観念論は、客観的『普遍妥当的』と考えられ、模写説を取る者は客観的『対象との合致』と考えよう。だから構成主

義の立場に立つリッケルトが、価値の普遍妥当性の方向で認識の客観性の問題を処理しようとしたのは、それなりに筋が通っていると言えよう。リッケルトとともに模写説を退けたウェーバーが、(一)の方に傾くのは理屈としては当然だろうが、実際にそうかどうかは、はっきりしない。彼の場合、可能性判断の客観性は、経験からの帰納推理が持つ妥当性に帰着するようにみえる所もあるが、明確でない。またその「妥当」が「人々への妥当」の意味か、「経験への妥当」、従って対象である特殊なケースへの妥当の意味か、あるいは両者をともに含むのかもはっきりしない。彼は客観性を問題にしながら、その意味を突き詰めて考えていないようにみえる。だから前述のようにそれを客観との合致とみたのは、私の解釈である。不可知論に陥るまいとすれば、何らかの形で(一)の意味を維持しなければならぬが、特定の価値観点による対象領域の限定という、リッケルトのウェーバー的認識論の基本的前提の下でも、(一)の意味の客観性を言うことができることは、しばしば繰り返して来た通りである。いずれにしても、ウェーバーにおける現実科学的認識の客観性について論ずる場合には、その意味をまず明確にしなければならない。客観性≡非恣意性とみることもできようが、あることが主観の恣意によらぬと言えるのはなぜかと問われれば、対象の在り方に従っているからとか、悟性的意識の法則的条件に従っているから、などと答えねばなるまい。そして本当に問題なのはこの種の答えなのである。だから客観性≡非恣意性と言うだけでは、言葉の置き換えにすぎず、肝心な点が素通りされてしまう。

上に整理した考え方は、どのように評価するべきであろうか。まず指摘できることは、歴史認識の客観性を最終的に保証するのが経験規則の客観性だとすれば、議論は全体として循環論に陥るということである。なぜなら、「経験科学は……一方では具体的な諸連関からの抽象によって因果の諸規則を発見し、他方では具体的因果連関

をこの諸規則に関係させることによって説明しようとする」と言われているように、認識を支える経験規則は逆に歴史認識から得られ、規則の客観性もそれによって確認されるからである。もっとも、この種の循環はウェーバーの科学論だけに特有なものではないし、さして重大なものでもない。一般に経験の領域に踏みとどまり、その支えを超経験的なものに求めようとする限り、こうした循環は不可避的である。歴史認識を可能にする経験規則と、後者を可能にする前者との絶えざる循環の中で、経験規則のストックとその蓋然性の程度が少しづつ拡大され、認識の客観性の程度も平行して高まっていく。可能性判断の妥当性が確率論的蓋然性の性格を持つと考えられている限り、科学論としてはこれで十分で、循環の問題は支障にはならない。

しかしながら、価値観点と帰属判断自体を区別することによって、認識の客観性の問題を処理しようとするウェーバーの試みは正当であらうか。もし彼が言うように価値観点が主観的ななら、その上に立つ判断も、全体としてやはり主観性を免れ得まい。価値観点を括弧に入れて主張した、判断のどんな意味での客観性も、括弧を外せば消え去るし、外さなければ判断は成立しない。換言すれば、判断が全体として客観的であるためには、価値観点も同じ意味で客観的でなければならぬ。だから本来分離しては扱えない価値観点と帰属判断を区別することによって、現実科学的認識の客観性を確保しようとするウェーバーの試みは、望みのないものである。だが今の場合本当の難点は、価値観点を単に主観的とみる点にある。これは前述のように主観的＝客観的なものであった。だから正しく行われた判断も、純粹に客観的なものではなく、価値観点に規定されたもの

として、やはり主観的—客観的である。価値観点に規定される現実科学は、一般に純粋な客観性を持つことができない。因果帰属判断がそうしたものでないことは、適合的原因と偶然的原因の区別が、實在的因果連関に内在する「客観的因果性」の相違でないとされてきたことから明らかである。主観的—客観的な価値観点Aから光りを当てるか、Bから光りを当てるかによって、本質的なものとして浮かび上って来る構成要素も、検討対象として浮かんて来る要因も違って来るし、両者の間の客観的實在的因果連関が、適合的と意義づけられるか、偶然的とみられるかも違って来る。だがこうした違いにもかかわらず、それらがすべて客観自体の部分的特殊的「反映」であることには変りがない。史料や経験規則に則して正しく光りが当てられている限り、それらが客観の部分的特殊的反映である、高度の蓋然性をもって推定可能である。だからこの「反映」について客観との部分的合致という意味での客観性を言うことができるとともに、それが主観的—客観的な「光り」とも離れ得ない限りにおいて、主観—客観性を指摘しないわけにはいかない。単に因果帰属判断だけでなく、一般に現実科学的認識にとって可能な「客観性」とは、主観的—客観的な価値観点と相関的な「客観自体の・そのつどの部分的特殊的反映が持つ性格である。ウェーバーがこうしたことを見通していたとは言い難いし、客観性という言葉で正確に何を理解していたかも、さほどはっきりしないのは、価値観点の性格理解に問題があったからであり、更にその遠因は彼の構成主義にある。

- (1) Weber, 168, 172f., 178, 270 (徳永氏訳、二七、三二、三八ページ、森岡氏訳、一八二ページ)
- (2) Weber, 251 (森岡氏訳、一五三—一五四ページ)
- (3) Weber, 245, 248 (森岡氏訳、一四六、一五〇ページ)
- (4) Weber, 257, 261 (森岡氏訳、一六三、一六九ページ)
- (5) Weber, 259f. (森岡氏訳、一六七ページ)
- (6) Weber, 258 (森岡氏訳、一六四ページ)
- (7) 堀米庸三氏『歴史と人間』七九、二三八—二三九ページ参照
- (8) Weber, 249 (森岡氏訳、一五二ページ)
- (9) Weber, 123, 248, 252 (松井氏訳、二〇九ページ、森岡氏訳、一五〇、一五六ページ)
- (10) 小倉志祥氏『マックス・ウェーバーにおける科学と倫理』第一章第三節
- (11) Weber, 247, 252f., 262f. (森岡氏訳、一四九、一五六、一七二ページ)
- (12) Weber, 261f. (森岡氏訳、一七一ページ)
- (13) Weber, 286 (森岡氏訳、二〇六—二〇七ページ)
- (14) Weber, 285 (森岡氏訳、二〇五ページ)
- (15) Weber, 283, 286f. (森岡氏訳、二〇一、二〇五、二〇七ページ)
- (16) Weber, 273f. (森岡氏訳、一八七—一八八ページ)
- (17) 市井三郎氏『哲学的分析』第一部第三章
- (18) Weber, 226, 275f., 278f., 280, 283f., 290 (森岡氏訳、一七七、一九〇、一九一、一九五—一九六、一九八、二〇二、二〇五、二一一ページ)
- (19) Weber, 276f. (森岡氏訳、一九〇、一九二ページ)
- (20) Weber, 276f. (森岡氏訳、一九〇—一九二ページ)
- (21) 小倉氏前掲書、一五〇ページ
- (22) Weber, 290 (森岡氏訳、二二二ページ)
- (23) Weber, 287 (森岡氏訳、二〇八ページ)
- (24) Weber, 288f. (森岡氏訳、二〇八—二〇九ページ)
- (25) Weber, 261 (森岡氏訳、一六九—一七〇ページ)

(26) 佐久間孝正氏「ウェーバーにおける因果認識の方法と課題」(『科学と思想』第二号所収) 第四節参照

(27) Weber, 193f. (松井氏訳、(二)一三五ページ)

#### (四) 歴史叙述の主観性——ウェーバーの問題意識から脱落しているもの

認識の主観性については、歴史学とそれ以外の現実科学とは、著しく異なった事情にあるのだが、ウェーバーはそのことに気づいていない。認識の主観——客観性に関する前節の私の叙述は、両者を区別しないウェーバーの問題意識を前提した場合に言えることを示そうとしたまでである。だから今までの議論で片づいたと言えるのは、歴史学以外の現実科学的認識の主観——客観性の問題だけで、現代の歴史学方法論で扱われている問題は、極論すればまだ触れられてさえないのである。以下われわれはウェーバーを離れ、問題を歴史叙述に絞り、それがいかなる意味で主観的であらざるを得ないかを一般的にみることにする。この種の検討も、彼の問題意識の限界を明らかにし得るという意味で、ウェーバー研究の一端であり得よう。

まず研究対象と、それへのアプローチの仕方とが、実際にはどのようなになされるか、から考えていこう。時代の歴史的社会的状況とのかかわり合いの中から生まれて来る、認識主体の問題意識や価値意識を、歴史観と呼ぶとすれば、これは特定の時代のある特定の状況に置かれた主体が抱くものとして、単に個人的なものだけから成っているのではないにしても、やはり主観性を免れることができ

ない。そして無数の因果系列の連鎖の中から、われわれの歴史観が意味あるものと解釈した特定の発展系列だけを切り出し、しかもそれを特定の側面から問題にしていくことによって、歴史認識は初めて可能なのである。だから一般に歴史認識は、主観的歴史観による解釈なしには一步も進み得ないものである。ウェーバーが言うように、対象自体に含まれる意味内容を汲み尽くすことを目的とする価値解釈といったものが、認識の第一次の対象の決定に関与していることは確かであろう。だが(一)過去の事象は過ぎ去ってもはやなく、また(二)過去と現在の間に価値観などの普遍性がないか、あるいは有無の厳密な確認のしようがないとすれば、認識主観がどんなに没主観的であろうとしても、価値解釈は彼の歴史観の枠を超えることができない。だからウェーバーの考えと違って、過去の対象が含むすべての意味内容がまずあつた通りに客観的に取り出された後で、特定部分への研究観点の限定が、初めて主観的に行われるのではない。まず主観的解釈があり、その上に、解釈された限りでの対象に対する研究観点が、解釈に支えられて、主観的に付け加わる。だから研究観点の限定は二重に主観的である。このように、主観的に解釈された限りでの対象にしかかわり得ないものである限り、歴史的・研究観点については、前節で言われたような主観——客観性を指摘することは困難である。研究観点のこうした二重の主観性や、研究対象の内容と解釈されているものにまず附着する主観性は、ウェーバーの与かり知らぬものであった。

ところで対象とアプローチの仕方の決定は、歴史観による主観的解釈の中を動くのみであるという意味で、主観的であるばかりでなく、価値判断をも含むという意味においても、主観的であらざるを

得ない。これは、現実科学的認識はすべて価値関係的であるから、ある事象を例えば経済的観点とか政治的観点といった、限られた主観的観点からみざるを得ないといったレベルの問題とは違う。この意味での主観性は価値判断を含まず、これと無関係である。例えば経済史家として、ある事象を経済的観点からみている者も、政治史家がそれを政治的観点からみるのを批判したりはしないだろう。ウェーバーが歴史認識の主観性ということで問題にしたのは、こうしたレベルのものにすぎなかった。だが自分を経済史家とか政治史家には限定せず、歴史を全体的に考察することを建て前とするような歴史家も、実際には主としてある特定の発展系列のある特定の側面から考察しているわけであり、そうさせているのが歴史観なのである。

これは、それこそがまずもって問題にさるべき発展系列であり、それこそが対象への有意義なアプローチの仕方と考えられているものなので、他の歴史観や対象選定やアプローチの仕方への価値判断を本質的に含んでいる。時代の変化によって歴史観が変るたびごとに、歴史は書き換えられていくけれど、歴史の書き換えは、以前の歴史叙述とそれを支える歴史観への厳しい価値判断的批判を常に伴っている。こうした主観性は、歴史叙述をその根底において規定するものであって、因果帰属の手続きが論理整合的になされることによって克服できるようなものではない。

だが歴史認識の主観性は以上で尽きるのではない。以下この問題を、多少の重複を恐れず、もっと広い視野からみることにする。

過去の事実が過ぎ去ってもはやないので、認識の客観性——対象との合致——を検証し保証するものが厳密に言えば欠けている。だから歴史科学は本来「推測科学」であり、主観性が本質的に付きま

う。単に歴史年表的事実の知識は史料によって確証でき、客観的であり得るが、われわれが問題にする歴史的事実の中には、年表的事実のほかに、その原因や影響、結果なども含まれている。また対象が意識の主体の場合には、原因の探究は目的や動機、意図の研究となる。こうしたものの研究は普通「解釈」と呼ばれるが、それに主観性が入り込むのは避けられない。このことは、特に意図や動機の解釈について言えるだろう。過去の主体はその価値観や世界観に基づいて行動したわけであるが、過去と現在の間に価値観などの普遍性がないか、あるいは少なくとも有無の厳密な確認のしようがないとすれば、歴史家は自己の歴史観に基づいて推測するよりほかはないことになる。過去とは現在から推測されたものであらざるを得ず、現在を離れた過去そのものは、歴史叙述には存在しない。似たようなことは、多かれ少なかれ他の解釈にも言えるだろう。史料はもちろんその手掛かりであるが、それには作成者の利害関係や価値観による事実解釈が既に加わっている。解釈が入らない「客観的」史料は、歴史年表的事実に関するもの以外は少ないであろう。だから歴史認識は二重の解釈である。

もっとも解釈は、特に社会諸科学が提供する科学的知識を手掛かりにすることができ、諸科学が歴史に与えるのは、現存するものについての一般的知識であって、過ぎ去ってもはやない過去の個別的事象についての知識ではないが、過去の事象と同種の多くの現存する事象に一般的に妥当する認識は、過去のものにも妥当する客観的なものと推定せざるを得まい。こうした推定なしには、科学としての歴史は存在しないことになる。科学的知識によって、原因——結果の枚举やそれらの適合度の解釈の主観性は大幅に減少する。特に、

社会の広範囲な構造連関や作用連関、連関法則などの科学的知識の増大によって、個別の対象が持つ多様な側面のばらばらで並列的な認識を、客観的に統一する可能性が開かれる。また発展系列を全体的にしかも客観的に捉える可能性も増大しよう。だからわれわれは歴史認識の主観性を、過度に強調しないように用心しなければならぬ。だがそうは言っても、多様な側面を構造的に連関づけたり、広範な発展系列全体にわたる統一的説明を与えるような知識は、断片的知識に比べて厳密性に乏しい。統一的なもののほど厳密さが乏しくなると言えよう。それに統一的知識と言っても、例えば経済的観点から社会の全現象をみるといった理論があるのみで、社会現象の説明に必要なすべての観点を客観の在り方に即して全体的に秩序づけるようなものは、厳密な科学理論としてはまだ存在していないと言わねばならぬ。そこには避け難く歴史観が入り込んで来るわけで、統一的な理論ほど歴史観と区別できない。だから歴史観は前述のように、叙述対象とアプローチの仕方の解釈及び選択基準として機能すると同時に、仮説的な統一的説明原理としても機能していると言えよう。その意味で、統一的な歴史叙述ほど主観的になると言わざるを得ない。「しかし歴史家に最後に要求されるものは……そういう仮説に基いて書かれた大きな歴史の見取図ではあるまいか。そういう仮説こそほんとうの歴史観と呼ぶべきかも知れない。歴史家は、最後には、それに賭けるか賭けないかの決断を迫られるはずである。賭けられない歴史家は、せつせと働くが職人のようなビジネス・ヒストリアンで終るしかないだろう」。

ところで歴史叙述は事象の認識のほかに、価値判断を伴っていることが多いという意味においても、主観的である。私は前に、叙述

対象とアプローチの仕方の決定に価値判断が含まれていることを指摘したが、ここで問題にするのはそうしたことでなく、叙述にもつと表立って現れて来るものについてである。科学的認識と価値判断の峻別の要求は、リッケルトとウェーバーに共通だが、歴史叙述から価値判断を排除することが望ましいかどうかには疑問がある。必要なのは価値判断の排除ではなく、科学的認識との違いを自覚しながら、価値判断を行うことではなからうか。私が他の論文で指摘しておいたように、リッケルトも、歴史叙述に価値判断が混入すること、断固たる禁止的態度を取ってはいない。両者の関係の問題は、われわれは何のために歴史を学ぶのかという問題と深くかかわっている。歴史への関心は根本において、主体の現代における実践につながるものであり、だからこそ歴史は急激な変革の時代に最も多く省みられる。トレルチは現在を規定する種々の伝統を批判的に選択して未来へと継承することを、「現在の文化総合」と呼んだ。これは未来の形成のために過去を考察評価しなければならぬということ、過去の考察評価は未来の形成を目指す主体の実践的関心に依存するという、二つのことを含んでいる。トレルチは現在の文化総合を構想することは、「実質的歴史哲学」の課題だと言うのだが、経験科学としての歴史叙述も——それがビジネス・ヒストリアンの問題意識に担われているにすぎないようなものでない限り——それと似た衝動に動かされているのではなからうか。そうだとすれば、歴史叙述が価値判断を回避するのは困難である。少なくともある統一的歴史観に賭けるような歴史家は、それを避けようとはしないだろう。こうした評価は、事象が及ぼした歴史的影響の量と質とに基づくから、因果関係に関する科学的知識と無関係でないことは言うまでも

ない。だが何に、対する、影響を評価の決め手とするか、いかなる種類の影響を肯定的に評価すべきものとみるかの決定は、価値判断基準として機能する歴史観の仕事であって、科学的知識の機能ではない。もっとも、歴史の動きは全体として必然的法則に貫かれていないこと、歴史と社会の統一的な科学理論がこの法則を捉え得ること、歴史の必然に即した事象が肯定的に評価されるべきこと、従って価値判断は科学的客観的になし得ることなどを主張する人もあろう。だが歴史の動きに必然を言えると仮定したところで、それを肯定的に評価すべきか否かは、まだ少しも必然的でない。事実と評価は別だからである。必然とされたある種の動きを肯定的に評価すべきものとみなしているのは、それを発見したと称する科学理論とは別な歴史観である。それに歴史の全体的な動きを云々し得るほどにまで、理論が統一的になればなるほど、主観的歴史観の性質を帯びることは前述の通りである。歴史叙述はそれによる価値判断の主観性を避けることができない。

以上要するに、社会諸科学が提供する客観的知識や多くの史料の存在にもかかわらず、歴史叙述は究極のところ、歴史家が抱く歴史観の「関数」であるという性格を免れることができない。この種の主観性は、本来克服されるべきものでありながら、克服し切れずに残っているといったものではなく、歴史が単なるビジネス・ヒストリアンの営み以上のものであるために、不可欠のものである。だがこうしたことは、リッケルトの場合と同様ウェーバーの問題意識からも完全に脱落している。彼が知っていたのは、現実科学的認識全体に通ずる価値関係的アプローチの主観性であって、歴史学に固有のものではない。しかもその主観性は、実は単なる一面性にすぎ

ないものであった。必ずしも主観的とばかりは言えないものを徹底的に主観的とみる一方、真に主観的なものの存在を見落している点で、彼はリッケルトの構成主義的問題設定を大して抜け出していないように思われる。

- (1) 神山氏前掲書、五四ページ
- (2) 神山氏前掲書、七七—八三ページ参照
- (3) 神山氏前掲書、八一ページ
- (4) 拙稿「リッケルトの歴史哲学」九ページ
- (5) E. Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme*, Kap. I, 4; Kap. II
- (6) vgl. A. Schaft, *Geschichte und Wahrheit*, 225 (森岡 木戸両氏訳『歴史と真理』三三七—ページ参照)

#### (五) ウェーバーの歴史学方法論の問題性と有効性

##### 個別的因果帰属判断の問題性

『批判的研究』では、因果帰属判断にとって不可欠な法則論的知識が、「自分自身の実生活や他人の振舞についての知識から得られた経験知」であるとされ、科学的知識とは言われていない。だが『社会学の基礎概念』では、因果帰属に際して歴史学は社会学が示す一般規則を手掛かりにすることが指摘され、『客観性』論文では、法則論的知識が「因果連関の法則性の知識」と言い換えられ、経済学などの「特殊科学」と関連づけられている。だからこれは実生活の経験から得られた知識のほかに、実証科学とりわけ社会諸科学から得られた科学的知識を含むとみてよい。もっとも、『社会学の基礎概念』



で言う「社会学」は「理解社会学」で、一般規則とは「思念された主観的意味」を持つ社会的行為についてのものである。だが問題の知識を行為の一般規則に限定するのは適当でない。現代の多くの実証的な歴史家は、社会のさまざまな法的関係を含む構造連関、作用連関などとの関係において事件を捉えようとしている。こうした方向でウェーバーを捉えようとすれば、法則論的知識は社会諸科学的知識と解されるべきであるし、そうした解釈の可能性を「客観性」論文が示唆しているとみることも不可能でない。

ところで、社会諸科学的知識が明らかにする社会のさまざまな在り方は、ウェーバーの考えとは違って、因果帰属判断の単なる手掛かりにすぎないものではなく、それ自身が独自の因果要因として機能し得るものでもある。史料に即してその存在が確認されるような個別的なものだけが歴史の原因ではなく、科学的認識によって知られる一般的なものも原因になりうる。これは、歴史の主体である個々の社会形象や個人の在り方、相互関係を規定するところの、形象相互・個人相互・形象と個人相互・ないし政治的経済的宗教的などの諸要因相互の・法的関係を含む包括的な種々の構造連関、作用連関である。因果帰属をウェーバーのように常に個別的なものとみるわけにはいかない。もっとも、一般に因果的説明とは、確率的命題の形で表現される法則であれ、社会事象については得にくいような全称命題で表現されるものであれ、ともかく、ある一般法則があり、それにある個別的な初期条件が加わって、法則が規定する事実が起こったと説明するものである。この場合、普通個別的な初期条件の方が、当の法則の下での原因とみなされている。だから因果帰属判断とは、個別的事象を一般的な法則論的知識にはめ込む

ことだと言うウェーバーの主張は、正しいようにみえる。だが自然事象と違って社会事象では、法則と初期条件の峻別が難しかったり、無理だったりの場合が多い。例えば「ある条件が加わらない場合には、ある社会形象ないし形象相互の関係の動きは、これこれになるのが普通である」というような、社会の構造連関的性質を表す法則の場合を考えてみる。問題の条件が加わらなかったときには、そのこと自体を初期条件つまり原因とみるよりも、むしろこうした連関的性質自体を原因とみるべきではないか。そうすると、一般的傾向というものは、因果帰属判断の手掛かりとしての法則であるばかりでなく、原因でもあり得ることになる。問題の条件が加わらなかったのは、何らかの主体の意識的決断のためと言うよりは、当の連関的性質自体に促された、ごく自然なことであつたような場合には特にそうである。それに初期条件と法則を峻別できる場合でも、前者が常に個人とか個々の事件といった意味での個別的なものとは限らない。前者は後者に比べれば個別的であろうが、内容的には個人や個々の事件とは異なった、もっと一般的な社会の構造連関的性質でもあり得る。こうしたものは、より一般性の高い法則との比較において、個別的なだけである。

ウェーバーの個別的因果帰属の立場は、法則科学と峻別された「現実科学」に歴史学が組み込まれたことと関係があるけれども、その根はもっと深いと言える。それは、社会形象を個人の主観的意味に担われた社会的行為に還元しようとする方法論的個体主義の立場につながり、更に個人の主体的実践が歴史において占める役割を強調する歴史観につながり、究極的には、無意味な現世を主観的価値によって主体的に意味づけようとする、ウェーバーの実践的エトスに

根差す。またそれは、実践的エトスに支えられた構成主義的認識論にも根差している。主観による意味付与的構成以前の客観を、無意味なカオスとみなす立場は、客観自体が一定の構造連関によって整序されているという考え方となじまない。だがたとえ何に根差そうと、一般的なものが因果要因として機能し得る事実を動かすことはできない。

ところで、因果帰属判断は認識主観の問題意識と相関的なので、適合的原因とされるものは、問題意識の違いに応じていろいろであり得る。だが同じものについての認識が、違った内容の単なる並列に終ってよいわけではない。一つ一つの認識は一面的であらざるを得ず、その積み重ねによる以外、一面性を克服する方法がないことは確かである。だが積み重ねといっても、単なる並列では困るので、対象の統一的把握が可能ないように、一面的認識が有機的に組み合わされなければならない。そのためには、種々の適合的原因が重要度に応じて秩序づけられねばならないが、重要度の判断基準は、もはや主観の問題意識ではあり得ない。さもないと、問題意識の違いに応じて、有機的統一が再び数多くばらばらに出て来て、話しは振り出しに戻ってしまう。だから対象の(一)内的構造や、(二)対象が他のさまざまな社会事象とのかかわりにおいて持つ構造連関の機能や意味、(三)対象を自己の一部として含むある全体的な構造連関の在り方などが、その基準であらざる得まい。だからある対象の場合には、宗教的側面からみたものが本質的で重要度が高いのに、他のものの場合には、経済的側面からみたものの方が重要だといったことが起こって来るはずである。しかも単なる主観的判断としてではなく、対象の在り方に即した客観的判断として、こうしたことが可能でな

ければならない。ちょうど、対象との出会いの中で固定された妥当な研究観点が、客観的であり得るように、観点相互の重要度にも、対象の在り方に拘束された客観的な相違があり得るのである。もっとも、対象の在り方と考えられたものが、推測科学としての歴史学では、果たしてどの程度本当に客観的であり得るかは疑問と言えるが、これは今の問題でない。今の場合は、対象の側からの拘束があらざるを得ないこと、認識の主観性の主張も、こうした拘束を認めたと上でのものであることを確認すれば足りる。いずれにしても、ウェーバーの科学論から、上記のような構造連関的客観的判断の可能性を引き出すことはできない。それは彼が主観的なものとみられた研究観点のみに認識を基づけ、客観的メルクマールには基づけようとしないう立場に呪縛されていたからである。

判断相互の間に、横の関係として指摘されたのと似たことが、縦の関係にも生じて来る。何らかの全体的なもの・ある統一的な意味を持つと考えられる・継続的因果連関を「発展」と呼ぶならば、どんな歴史事象も発展を持つか、あるいは発展の中にある。孤立的にしか存在しないようなものはないし、仮にあったとしても、そうしたものは普通研究対象になるまい。歴史叙述の直接の対象は、第三節で述べたように、われわれの歴史観によって意味あるものとみなされた発展か、あるいはその中に位置を持つものだけであろう。

だがウェーバーが言う意味での因果帰属のためには、発展過程を切断し、研究を特定の時点に限定しなければならぬ。発展過程の一部を思维的に抽象し、その中でだけ因果関係を論ずる形になる。だから発展過程全体は、因果帰属をつなぎ合わせていく形でしか構成されないが、こうした構成過程でも、二つの限定的なものとの間の因

果関係のみが、そのつど孤立的に問われるだけなので、全体的統一的なものは視野の中に入って来ない。ウェーバーは『客観性』論文で、「発展」概念についても理念型が構成できるという意味のことを述べているが、そこで言われているのは、例えば手工業的経済形態から資本主義的経済形態への移行であって、前述のような意味での発展ではない。一般に発展という概念はひどく無造作に使われて多義的であるが、ウェーバーでは限定されたあるものから他のものへの移行という意味での発展は問題になり得ても、そうしたものを包括する全体的連続的連関としての発展は問題になり得ない。だから発展過程全体を貫き動かしているような構造連関や連関法則があったとしても、それが因果帰属判断に入ってくる可能性はない。ウェーバーが個々の因果関係を有機的に統合し規定する構造的なまとまり方という意味での法則を認めず、ある限定されたものの間——例えば目的と手段の間——に認められるような類型的な結合関係しか「法則」という言葉で理解しようとし<sup>(5)</sup>ないのは、その一つの現われである。われわれは前に、史料に即してその存在が確認されるような個別的なものだけが原因になるのではなく、科学的認識によって知られる一般的なものも原因になり得るのをウェーバーが見落したことを指摘したが、こうした事実と今の問題は密接に関係する。われわれはその理由を因果帰属判断の細分性に求めることができるし、後者を更に構成主義に求めることができる。そこでは、客観それ自体は無数の個別的因果関係のカオスでしかない。法則的關係を含む構造連関も、発展の名で呼ばれるようなまとまった因果連関もそこにはない。まとまりは主観の構成によって初めて生ずるが、それとてカオスの中から抜き出された個々のものの断片的関連づけで

しかない。構成主義がある限り、因果の問題は、個別的なものとの因果的適合関係を問う形でしか処理されないであろう。その結果、歴史叙述にとつて重要な発展の十分な説明が不可能になるとすれば、構成主義もその上に立つ個別的因果帰属も、歴史学の方法としては不十分なものと言わざるを得ない。

#### 客観的可能性判断理論の有効性

横にも縦にも断片的な因果帰属判断を上記のように評価すると、その方法である客観的可能性判断理論の意義が問題となる。これを明らかにするためには、歴史の在り方に立ち入らねばならない。歴史は時として、意識的主体の個人的行為や個別的事件によって、その巨視的な動きを左右される場合がある。また逆にその動きに、何らかの法則性が貫徹していると言えるような場合もある。社会のさまざまな基本的な構造連関や連関法則といった一般的条件に規定され、歴史が一定の趨勢ないし発展過程を必然的に辿るようにみえる場合がそうである。個々の行為や事件といった種々の微視的現象ないし個別的条件の介入なしに、歴史が動くことはあり得ないにしても、それらの在り方の大勢が、一般的条件によって規定され、個別的条件が一般的条件の指示する方向に向かって、ごく自然に動いていくようにみえる場合が、歴史にあることは否定できない。だが、歴史の動きが唯一必然とみえるのは、それを後で整理し、跡づけてみたからで、過程のそのつどの時点には、複数の可能性が潜んでいたと考えられるような場合もまた、少なくはないのである。そうした場合には、歴史があるコースを辿ったのは、一般的条件が許す複数

の可能性の中から特定のものだけを実現させるような、特殊な個別的条件が共働したからだということになる。この場合には、個別的条件が歴史の巨視的な動きを左右したと言えよう。趨勢や発展過程が法則性を持つと言われるような場合でも、そうなるためには特定の初期条件や何らかの環境条件が成立していなければならないが、こうした条件が実際に成立するかどうかも、一般的条件が規定し切れるわけではない。個人の行為や個別的事件などの個別的条件が初期条件を左右し、場合によっては環境条件にも何らかの影響を与える。個別的条件のこうした機能は、一般的条件に促されてごく自然に作用する場合もあるが、いつもそうだとは限らない。だから歴史は一般的条件と個別的条件の絡み合いの形で動いていくのである。その有様を如実に描くのが、社会構造史の上に立つ事件史なのである。そこでは、それぞれの条件が歴史の流れにどの程度の影響を持ったのが重要な問題となる。客観的可能性判断という、反事実的条件判断操作が物を言うのはここである。だがこれはウェーバーのように個別的因果帰属と密着させず、それからもう少し引き離されねばならない。つまり「結果」とみなされるのは、個別的事象ではなく、われわれの歴史観によって意味あるものとされ、かつ研究の枠組みとして据えられている歴史のある発展の巨視的コースでなければならない。研究の一時的な考察過程においてはともかく、研究の最終目的に関しては、そうでなければならないまい。また個別的条件と一般的条件の双方が、その「原因」としての適合度を問われるのでなければならない。一般的条件の内容とその動きの方向が一義的であり、またそれが個別的条件の在り方を自己と同一の方向にごく自然に規定したとみられるような場合——つまり歴史の動

きに複数の可能性を指摘するのが難しく、柔らかい必然性を主張できるような場合——には、一般的条件が適合的原因と規定され得る。客観的可能性判断はこうしたケースにも適用できるだけでなく、むしろそれを適用してみても初めて、歴史の動きが必然的と言ってよいようなものだったことが明らかになるのである。可能性判断は個別的条件を過度に重視する歴史観の下でしか意味をなさぬようなものではない。だから社会諸科学が明らかにする一般的知識が示す事柄は、その内容や研究対象の在り方や研究状況などによって、原因としての適合度を問われるものとなったり、あるいは、実生活から得られた規則とともに、可能性判断に手掛かりを与える「一般規則」として機能するにすぎないものとなったりする。こうした条件づきの下のみ、ウェーバーの客観的可能性判断理論は、歴史学の方法として高度の有効性を持つであろう。歴史叙述に反事実的条件命題を導入するのは、「歴史上の未練を話題にして楽しむ」「思想上の未練学派」the 'might-have-been' school of thought のやることであるという E・H カールの嘲笑には、着眼の面白さはあっても、さしたる意味は認められない<sup>10)</sup>。この種の判断なしには、一般的諸条件と個別的諸条件との絡み合いを、影響力の重要度を評価しながら解きほぐしていくことができないのである。

最後にウェーバーとリッケルトの関係を要約しておこう。リッケルト理論を修正せずに引き継いだ箇所では、ウェーバーは科学方法論に実質的な貢献をしていない。現実科学的認識が価値関係のであるというようなことは、実質的な方法論にとっては、さしたる意味を持つものではあるまい。彼が実質的に意味あることを言い得たの

は、理念型理論と客観的可能性理論、つまりリッケルトを踏み越えたり、全く新しく付け加えた部分においてである。リッケルトの構成主義の影響を受けたことは、ウェーバーにとって不幸なことだったのではなからうか。

- (1) Weber, 277 (森岡氏訳、一九二ページ)
  - (2) Weber, 559f. (阿閉、内藤両氏訳、三一一三三ページ)
  - (3) Weber, 177 (徳永氏訳、三八―三九ページ)
  - (4) 堀米氏前掲書、二二三三ページ
  - (5) Weber, 203 (徳永氏訳、六五ページ)
  - (6) vgl. Weber, 558 (阿閉、内藤両氏訳、三〇ページ参照)
  - (7) 佐久間氏前掲論文、第五節参照
  - (8) 以下の叙述は市井氏前掲書第一部に多くを負っている。
  - (9) E.H. Carr, *What is History?* 90f. (清水幾太郎氏訳『歴史とは何か』一四一―一四四ページ)
  - (10) 堀米氏前掲書、七五―七七ページ参照
- (一九七五・三・一四)